ISSN　0910-0660

JACET通信

一般社団法人大学英語教育学会

December 2019　The Japan Association of College English Teachers　No.206

目　次

巻頭言（寺内一）　1 頁
JAAL-in-JACET（小田眞幸）　4 頁
石田雅近先生の思い出（神保尚武）　5 頁
西村嘉太郎さんのご逝去を悼んで（畑中孝實）　6 頁
第 58 回（2019 年度）国際大会について　8 頁
　国際大会を振り返って（石川有香）　8 頁
大会報告（上田倫史）　9 頁
講演・シンポジウム　9 頁
第 59 回（2020 年度）国際大会　24 頁
第 2 回（2019 年度）ジョイントセミナー
　（淺川和也、田地野彰、渡辺敦子）26 頁
2019 年度 JACET 賞　29 頁
2019 年度 JACET 名誉会長賞　29 頁
JAAL-in-JACET 企画第 1 回授業学研究大会
　（馬場千秋、佐藤雄大、村上裕美）31 頁
本部だより（下山幸成）　32 頁
支部だより　45 頁

［巻頭言］

JACET 創立 60 周年に向けての諸活動の概要
―総務関連を中心に―

一般社団法人大学英語教育学会会長　寺内　一
高千穂大学

平素は本学会の諸活動に対し、格別のご支援を賜りまことにありがとうございます。2019 年 6 月 16 日より一般社団法人大学英語教育学会（JACET）の第 8 代会長職の最後の 3 期目を拝命いたしました寺内一でございます。1 期、2 期目同様、最後となります 3 期目の在任中（2021 年 6 月の社員総会まで）一生懸

命職務を全うする所存ですので、変わらぬご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

本稿では、『JACET 通信』205 号（Web 版）でご報告した人事関連を紙版として改めてご報告させていただいた後、2022 年に迎える JACET 創立 60 周年に向けての諸活動の概要（総務関連を中心に）をお知らせいたします。なお、2019 年度の 8 月に名古屋工業大学で行われた「JACET 第 58 回（2019 年度）国際大会（名古屋、2019）」に関しては上田倫史国際大会担当理事（委員長兼任）と小田眞幸副会長が、同じく 8 月に玉川大学で行われた「JACET 第 2 回ジョイントセミナー（東京、2019）」に関しては淺川和也・田地野彰・渡辺敦子セミナー担当理事が、それらの詳細を本通信で報告しておりますのでご覧ください。

1　新旧理事のご紹介

2019 年 6 月 16 日をもってご退任なされた役員（理事）は以下の通りです。尾田智彦理事（北海道支部長）、高橋潔理事（東北支部長）、村田泰美理事（中部支部長）、小栗裕子理事（関西支部長）、石川慎一郎理事（関西支部選出）、高橋俊章理事（中国・四国支部選出）、志水俊広理事（九州・沖縄支部選出）の 7 名です。先生方のこれまでのご尽力とご貢献に対してこの場を借りて御礼申し上げます。2019 年 6 月 16 日付で就任された JACET の役員（理事・監事）は以下の通りです。寺内一理事（会長）、尾関直子理事（副会長）、田地野彰理事（副会長）、小田眞幸理事（副会長）、上野之江理事（北海道支部長）、冨田かおる理事（東北支部長）、藤尾美佐理事（関東支部長）、石川有香理事（中部支部長）、植松茂男理事（関西支部長）、岩井千秋理事（中国・四国支部長）、石井和仁理事（九州・沖縄支部長）、相川真佐夫理事（会長指名）、淺川和也理事（会長指名）、上田倫史理事（会長指名）、木村松雄理事（会長指名）、河野円理事（会長指名）、佐藤雄大理事（会長指名）、下山幸成理事（会長指名）、内藤永理事（会長指名）、渡辺敦子理事（会長指名）の理事 20 名と駒田誠監事、笹島茂監事の 2 名です。任期は 2021 年 6 月の社員総会までの 2 年間となっております。理事会一丸となって JACET の運営にあたりますのでよろしくお願いいたします。

2　社員・本部運営委員・支部運営委員・研究企画委員の委嘱

2019 年 4 月 1 日から 2021 年 3 月 31 日までの 2 年間の任期で社員 81 名が選出されました。社員は『一般社団法人大学英語教育学会定款』の第 6 条（法人の構成員）の第 3 項「社員は一般会員による社員選挙で選出する」と第 4 項「社員は一般会員から選ばれる」に基づいております。さらに、『学会運営規程』に基づいて、顧問、本部幹事（各運営委員会の委員長）、正副代表幹事、各委員会の運営委員、各支部の副支部長と支部幹事、研究企画委員が同日の理事会で承認されました。なお、本部の正副代表幹事（任期は 2021 年 3 月 31 日まで）は以下の通りです。代表幹事（総務委員会委員長・総務担当理事兼任）は下山幸成理事、副代表幹事（総務委員会副委員長）は馬場千秋・金丸敏幸本部委員です。社員を含む 2019 年度人事は JACET の Web ページをご覧ください。

3　JACET 創立 60 周年に向けての諸活動の概要

1962（昭和 37）年創立の JACET は平成の時代を経て 2022（令和 4）年に 60 周年を迎えます。また、その前年の 2021 年には「JACET 第 60 回記念国際大会（広島、2021）」が安田女子大学（広島）で開催されます。この大きな大会をお引き受けいただいた中国・四国支部の皆様に心より感謝申し上げます。2011 年の「JACET 第 50 回記念国際大会（福岡、2011）」時には、大修館書店から『英語教育学大系（全 13 巻）』の刊行、『50 周年記念誌』の発行、発表言語の英語化へのシフト（「全国大会」から「国際大会」へ名称変更）、『プロシーディングス』の発行（後に『Selected Papers』へ発展）と、法人化への動きと相まって

JACET 転換のひとつの契機となりました。

一方、この 10 年で、さまざまなことが大きく変わりました。昭和 37（1962）年に誕生した JACET は令和の時代に入りました。技術革新やボーダーレス化による社会情勢の大きな変化、英語外部試験や CEFR 利用など入試情勢や質保証の動き、リメディアルや一般英語のアウトソーシングの増大、高等教育のユニバーサル化を担ってきた大学教員の退職などがそのひとつでしょう。AI を含めて時代が大きく変わろうとしており、英語教育が「大学」だけで完結しないのは当然のことで、この混とんとした時代に、「大学英語教育学会」として、将来に繋げるべく動きが必要となるのは必定のことです。本部では 2018 年度から「JAAL-in-JACET 学術交流集会」を復活させ、国際大会やセミナーの内容の見直しも開始し、今年度は「JACET 第 60 回記念国際大会（広島、2021）準備特別委員会」と「60 周年記念誌作成準備特別委員会」を 2019 年 4 月に立ち上げました。また、今後の「JAAL-in-JACET 学術交流集会」に関しては、私が『JACET 通信』203 号の巻頭言で触れておりますのでご確認ください。

本稿では、上記以外、特に総務関連での 60 周年に向けての諸活動についてご報告いたします。なお、その内容に関しましては、理事会での承認、案件によっては社員総会での承認が必要であるため、確定していないものも含まれていることを申し添えておきます。

3.1　消費税 10%への対応と会場使用料の徴収

2019 年 10 月 1 日から消費税が 8%から 10%に上がりました。2019 年度予算はそれを見込んで立てていますが、2020 年度は 4 月から 10%で計算することが求められ、JACET の事務局の置かれている英検ビルの家賃も値上がりしております。その他郵送代も含めてすべてが値上がりしておりますので、2020 年度予算はその分を付け足して計上する予定です。さらに、大会やセミナーなどのイベントを開催する際に、会員の皆様が所属する勤務校にお願いしてまいりましたが、会場使用料を請求される機会が本部支部を問わず非常に増えております。こうした状況に鑑みて、支部も含めて大会やセミナー参加費の見直しをせざるを得ない状況となっていることをここでご報告させていただきます。

3.2　事務局体制の変更

2019 年 4 月 1 日から事務局の 3 名の事務員の方と新たな契約を更新しております。なお、昨年度まで事務局長の重責を担われた保坂佳代子氏は 7 月 1 日から非常勤になり、この 7 月から事務局は植原美奈子氏（専任）、保坂佳代子氏（非常勤）、加山元子氏（非常勤）の 3 名で事務作業を行っております。この機会に JACET の『就業規則』なども時代に沿うべく改正し、それを契機に事務局長を置かず、事務局の電話等の取扱時間等も変更（平日午後 1 時から 4 時まで）し、さらに、月曜日から金曜日まで、事務局員が出勤せずに電話対応ができない日が生じております。ご不便をおかけすることになりますが、ご理解の程よろしくお願い申し上げます。

3.3　年会費や各行事への参加費の支払方法の改善

今後、海外からの年会費や大会等の参加費の納入の機会が増える可能性や、国内自体のキャッシュレス化が進むことを見越して、現行の郵便振込以外の会費納入方法を導入することについて議論を開始しました。決済方法として、PayPal や Air ペイ等のサービスを導入するなどクレジットカード等での支払対応の可能性を考慮し、「JACET 第 60 回記念国際大会（広島、2021）」を目標として、オンライン決済の導入について理事会で議論していきます。また、それに先駆けて、年会費等の領収書についても、紙版ではなく、希望がない限り PDF による電子ファイルの領収書にしていくこととさせていただきます。

3.4　賛助会員の会費種類についての再考

2018 年度の「第 1 回 JAAL-in-JACET 学術交流集会」をきっかけにして、産学連携研究を推進しております。JACET 会員と賛助会員との共同研究を推進するとともに、特に、賛助会員同士の情報交換とその共有、さらには、その情報の JACET 会員との共有をとおして、JACET 全体で英語教育、応用言語学におけるさまざまな課題をこの先 10 年間をターゲットにして考えていくものです。そのような状況下で、賛助会員・団体会員についても、今の時代に対応した会員種類を新たに設定する議論を開始いたしました。賛助会員・団体会員の皆様とも協議を重ね、今後、理事会での審議、来年度の社員総会での承認を経て、再来年度からの施行（「JACET 第 60 回記念国際大会（広島、2021）」から適用）を目標にしております。

3.5　『会員名簿』の扱いについて

毎年度発行している『会員名簿』については、社会的情勢と公開許可数の減少に伴い、その発行を継続していくかどうかも議論する必要が出てまいりました。会員の皆様のご意向も十分考慮していく所存です。

以上、JACET の発展と、日本はもちろん、海外も含んだ英語教育に貢献できるよう今後とも最善を尽くしてまいりますので、会員の皆様の益々のご理解とご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

JAAL-in-JACET
副会長・学術交流担当理事
（AILA, JAAL-in-JACET 担当）
小田　眞幸（玉川大学）

JAAL-in-JACET については、昨年 12 月に発行された『JACET 通信』第 204 号の Report from the Committee of Academic Affairs の中でも報告させていただいたのでご記憶にある読者の方も多いと思います。JAAL-in-JACET は、応用言語学の学会の国際的連合体である AILA の日本を代表する団体として 1984 年から登録されています。

JAAL-in-JACET が AILA の下部組織として正式に登録される過程で、小池生夫名誉会長をはじめ当時の理事会のメンバーであった諸先輩方が日本の応用言語学の将来を見据えて、ご尽力いただいたと聞いております。

ではなぜ、AILA の日本代表は JACET ではなく JAAL-in-JACET なのでしょうか。1980 年代の応用言語学は「言語学の研究成果をもとに社会で起こる諸問題の解決に貢献する学問領域」であると考えられていました（cf. Brown 1987 など）。扱う「言語」、そして解決すべき「問題」は必ずしも「英語」「教育」である必要は無かったのですが、当時の日本では、英語教育に関連した研究とその成果を利用した問題解決が同時の応用言語学研究の大きな部分を占めていたこもあり、これらを扱う研究団体である JACET が AILA の日本を代表して窓口となったという経緯があります。そのため敢えて JAAL-in-JACET というグループ（当時は現在の委員会と同等）を作り、将来的には英語教育以外の研究者との連携も考えていたようにも思えます。

それから 25 年、応用言語学を取り巻く環境、そして応用言語学そのものも変わってきました。去る 8 月の JACET 第 58 回国際大会（名古屋、2019）で行われた、JAAL-in-JACET シンポジウムのパネリストである AILA 会長の Daniel Perrin 氏、元 AAAL 会長の松田ポール圭氏、そして JACET 副会長の小田が、この問題について意見を交換いたしました。3 名が一致した点は、1)応用言語学は「言語・コミュニケーションの諸問題を解決すること」を目的としているが、必ずしも言語学の研究成果を利用しなければならないわけではないこと、そして、2)これからの応用言語学は「英語」「教育」を超えていかなければならないと

いうことでした。

では、英語教育研究団体であるJACETの中にあるJAAL-in-JACETの今後はどうなるのでしょうか。まずは年会費の問題です。すでにお知らせしているようにAILAの規程では1か国に1団体がその国の代表として認められています。応用言語学に特化した研究団体であれば、それぞれの団体の正会員が年会費の一部としてAILAの会費を支払っており、それによってAILAの運営が行われています。一方、JACETのように、英語教育の団体が国の代表を兼ねている場合は、会員を特定せず、協定に基づいた人数（JAAL-in-JACETの場合はJACET会員の約10%弱の200名）分のAILA会費（1名あたりUS$5）を毎年AILAに支払っているのが実情です。いわゆるこうした「みなし会員」ついて、AILAの理事会等では「廃止すべきである」という声もあがっていました。このことに対して、JACETも理事会で議論を重ねてまいりました。そして、第58回国際大会の会期中に担当理事である小田と、浅岡AILA担当学術交流委員、山内前AILA担当学術交流委員が、AILAからいらしたPerrin会長、Whitehouse財務担当理事と協議をし、暫定的に2023年までは現行のシステム、すなわちJAAL-in-JACETがAILAの日本代表を担い、「みなし会員」200名という条件でAILAの会費の支払いを継続することで同意しました。

次に、JAAL-in-JACETの活動についてです。寺内会長が巻頭言でも述べられておりますように、AILAの日本代表としてのJAAL-in-JACETの活動を、会員の皆様はもちろん、国内外の方々に認知し、さらに参加していただくために、さまざまな企画を考えております。そのひとつが、11月30日に高千穂大学で行われた「第2回JAAL-in-JACETI学術交流集会」です。さらには、同志社大学で開催されるJACET第59回国際大会（京都、2020）や、安田女子大学で実施予定のJACET第60回記念国際大会（2021、広島）においても、JAAL-in-JACETの活動がいろいろな形で提示できるように準備してまいります。そして、先述のシンポジウムで一致した「英語」そして「教育」を超えるべきであるという視点で、JACETから他の研究団体等に積極的に働きかけ、日本の応用言語学の発展に貢献して行きたいと思います。よろしくお願いします。

石田雅近先生の思い出

JACET顧問

神保　尚武（早稲田大学名誉教授）

本年の5月12日に石田先生がご逝去されたとの報に接し、あまりの突然のことでしたので言葉を失いました。重い病を患っていたことは承知しておりましたが、こんなに早く天に召されるとは思ってもおりませんでした。日本の英語教育界にとってたいへん大事な方を失ってしまいましたので残念で仕方ありません。

小生は石田先生と同学年であり、職歴の面では似たような軌跡を歩んで参りました。

先生は、JACETでは理事を長年にわたり務められました。特筆すべきは2006年に発足した関東支部の初代会長として獅子奮迅の活躍をされたことです。関東支部を誕生させ、発展の軌道に乗せた功績に感謝したいと存じます。特に第1回支部大会の際には自ら労を惜しまず、大会を成功に導き、支部の基盤を確立していただきました。さらに教育問題研究会では教員養成の課題に取り組んでいただきました。科学研究費での研究成果を着実にあげて下さいました。

先生は、大学で教鞭をとられる前に数年間、日本英語教育協議会（ELEC）に勤務されました。その縁もあったのでしょうか、ELEC同友会でも活躍され、会長まで務められました。本務校の清泉女子大学を同友会の研究大会に提供して下さいました。会場校の委員として自ら先頭に立ち、毎年の大会を意義あるものとして下さいました。現職英語教員や英語教員を目指す

学生にとってたいへん貴重な経験を与えて下さいました。先生の真骨頂は理論を実践に確実に結び付けたことだと思います。教員志望の学生の面倒見がたいへん良かったとうかがっております。

石田先生は早稲田大学教育学部英語英文学科を卒業後、東京外国語大学英語科、ハワイ大学英語教育大学院、テキサス大学大学院で研鑽を積まれました。

本務校の清泉女子大学の仕事に加え、早稲田大学で非常勤講師として英語教職課程を担当されておりました。小生も同課程で教えておりましたので、内容に関して打ち合わせをする機会もありました。英語教職課程用の教科書である JACET 教育問題研究会編の『新しい時代の英語科教育の基礎と実践－成長する英語教師を目指して』（三修社）の共著者にもなっていただきました。共同研究の成果としましてはJACET 監修の英語教育学大系第 7 巻『英語教師の成長―求められる専門性』を共に完成させました。

東京書籍で高校検定教科書の編集に共に携わったことも良い思い出です。最初の共同作業から生み出したのは「What's New?」で、革新的教科書として記念碑的な存在となりました。オーラル・コミュニケーションが導入された際には「Hello there!」を世に出し、同科目 A, B, C 全てで圧倒的なシェアを占めさせていただきました。東京書籍では現場の先生方のための啓蒙セミナーなども開催しましたが、石田先生はその責任者としても活躍されました。編集会議や企画会議のあとには宴会などが開かれたわけですが、宴たけなわになると石田先生が芸達者となり、その気色満面の演技には脱帽でした。

先生はNHK の高校英語講座も担当されました。マイクにのる美声で、分かりやすく、丁寧に放送されました。その経験を生かした出版として『英語が面白くなる Q&A150 1, 2, 3』（日本放送出版協会）があります。

晩年になり重い病を抱えられましたが、強い意志で任期をまっとうされ、定年を迎えられました。

本年に入り、病状がおもわしくなくなり 5 月に逝去なされました。先生のご遺志で献体なさることとなり、葬儀や告別式は行われませんでした。

日本の英語教育界に多大な貢献をなされた石田雅近先生、安らかにお眠り下さい。ご冥福をお祈り致します。

西村嘉太郎さんのご逝去を悼んで

元 JACET 理事・顧問
畑中　孝實（東北学院大学名誉教授）

西村さん、逝かれましたか。残念です。もう一度会いたかった。西村さんも小生もJACET とのかかわりは八王子のセミナー参加で始まったと思います。それからのJACET の諸会議ではいつも一緒で、やがて当時の理事の一人だった小池さんから「東北支部」設立の話が出て、それに続けるかのように小川会長が「東北、頑張れ」と幾度か檄を我々二人にとばしてくれました。

しかし、1960 年代後半から学生運動が激しくなり、西村さんも小生もそれぞれの大学で関係の職責にあって学生運動の対応に追われ、またこの時期に COLT という財団から日本の国公私立 30 の大学に３週間日本語を一切使用しない英語訓練である ITC を委嘱され我々二人の大学でもこれを実施したり、小生はアメリカの姉妹校に２年間続けて２か月間学生を引率して出かけたり、1978 年にはイリノイ大学に発話行為論や意味論の有名な学者たちが集まるセミナーがあるというので同大学の Kachru さんのお世話で小生は客員教授としてそれに 3 か月間参加するなどで多忙だった。このイリノイ大学でのある教授の講話中に後部から聞き覚えのある声が耳に入り最前列から振り返ると西村さんが立って質問をしていた。講話後すぐに彼を追いかけたが彼の姿はもう見えなかった。

堂々たる体格だったので、西村さんは何処にいて

もすぐ分かる。豪放磊落ではあるが、軽率な小生と違って緻密な思考の持ち主である西村さんは、例えば1981年にようやくJACET東北支部設立のめどが立った時、本部の企画委員会では第20回JACET記念大会を東北支部設立日に同時に仙台で開催するという案が出て支部幹事の小生に打診してきた。初代東北支部長の長谷川文学部長が「まかせる」というのでその件を小生は乗り気で支部役員会に諮った。

しかし、西村さんは慎重だった。「陣痛も起こらないのに産め産めと言われ、出産が済んだら、立て、歩けと言われているようなものだ」と彼は言った。他の委員も生まれたばかりの赤ん坊にミルクではなくウィスキーを飲ませるようなものだと発言されるので結局JACET全国大会の仙台開催は1983年10月ということに決まった。

ところが、1981年9月開催の東北支部設立総会でさえ我々支部役員にとって大変難儀なものだった。会場校の認可、本部との打ち合わせ、東北の約40の諸大学への通知と参加者確認などなど仕事が次々と出てくる。翌10月の役員会では1983年10月のJACET全国大会仙台開催までの諸準備を話し合いながら、小生は西村さんの先見の明と構想に脱帽していた。

1981年から2000年まで東北支部幹事及び支部長を小生が担っている間に全国大会を二度仙台で開催したが、西村さんが総合司会とかシンポジウムの司会やパネリストをするとそれらに重みが出てくることも確かだ。西村さんは支部運営のために様々なアイデアを出された。例えば、仙台以外の他県の地で例会をすること、日本に来られた著名な外国の学者に東京や京都のみならず仙台にも来てもらうことなどである。広い東北のある場所から仙台に来るのに仙台から東京に行く以上の時間がかかるという会員には望ましいアイデアだったし、ある時は福島の土湯温泉で一泊の例会を彼が世話して実施したこともある。

西村さんが2001年タイ王国のあるコミュニティ・カレッジ設立に副学長兼国際部長として参加されて3年ほど経った頃、小生にタイへ来て英語指導をやってみないかというお誘いをくださったが、小生は2003年3月退職と同時に専門を生かした仕事を依頼されたばかりだったし、少し余裕ある生活をしたいなどという思いもあってお断りした。

一昨年『函富亭灰神楽』という興味ある内容の彼が出した本を送っていただいたり、日本の文学作品を英訳し続けていることを知り、西村さんの衰えを知らぬ逞しさに驚いた。この時、ある百歳を超した有名な画家が「七十歳はまだ若造だ。これから、これから」と言っているということを聞いて、この驚異的な逞しいスピリットはまさしく西村さんにもあると思った。

その西村さんが逝かれたと聞いて驚いている。西村さんのことは語り尽くせない。西村さん、イリノイ大学で見失ったようなことは、今度はないと思うよ。お互い「若き日はや夢と過ぎ」去っている。安らかにお休みください。

【第 58 回国際大会】

JACET 第 58 回(2019 年度)国際大会を振り返って

中部支部長・大会委員長　石川　有香
(名古屋工業大学)

第 58 回国際大会は、8 月 28 日～30 日の 3 日間、名古屋工業大学にて開催されました。ご参加いただきました 742 名の皆さまに中部支部より厚く御礼申し上げます。思えば、村田前中部支部長の下で大会実行委員会が立ち上がったのは、2 年前のことでした。それ以降、本部支部大会委員の先生方は、準備作業に時間を奪われ、お忙しい日々を過ごされたことと存じます。さらに、大会では、前日の会場準備から最後の片づけまでが、過酷な暑さの中で行なわれ、体力も奪われました。初日は、雨に見舞われ、看板を抱えて構内を走りました。2 日目は、暑さが予想を上回り、クーラー調整で会場を走りました。3 日目は、再び雨の中で荷物の運び出しに走ることになりました。本部委員、本部事務、支部委員、学生委員の皆様のおかげで、無事大会を終えることができました。本当にありがとうございました。

さて、本大会は、これまでの大会テーマを引継ぎ、"Beyond 'Borderless': English Education in a Changing Society"をテーマとしました。AI を利用した翻訳機が開発される中で、英語教員はどのような役割を担うべきか。伝統的な学問分野の範疇が揺らぎ、学際研究が進む中で、英語教育学をどう捉え、どう実践していくべきか。新しい時代の大学英語教育のあり方について考える 3 日間と定義しました。

基調講演 3 本、9 本の招待講演の他、180 を超える発表がありました。中部支部も「社会言語学と英語教育」「工学と英語教育」など、特別企画を開催しました。素晴らしい講演・発表を頂いた先生方に心より感謝申し上げます。特に、特別シンポジウムでは、スイ

スからお招きした AILA 会長の Perrin 氏、アメリカ応用言語学会長の Matsuda 氏、JACET 副会長の小田氏が、これまでの「英語教育学」を振り返り、今後の動向について熱い議論を交わされました。内容も、名古屋で行われた ELF 実践としても、大会テーマと共に記憶に残るものとなりました。

本大会では、それぞれの先生方が新しい知見を得て、充実した時を過ごされたことと存じます。しかし、会場は古く、施設や設備の面で決して十分なものではありませんでした。今から思えば、反省点が多々あります。ご不便をおかけした皆様には、会場校として、この場を借りてお詫び申し上げます。

最後になりましたが、大会に助成金をいただきました大幸財団、懇親会に忍者ショー等を提供いただいた名古屋観光コンベンションビューロー、そして、寺内会長はじめ、大会の準備・開催に関わっていただいた役員と事務局の皆様に、改めまして、深謝いたします。本大会のために JACET に入会し、支部委員としてご尽力いただいた名古屋工業大学の先生方には、感謝の

言葉もございません。皆様、ありがとうございました。
来年は、京都でお目にかかれますよう。

大会報告

国際大会組織委員会本部委員長
上田　倫史（駒澤大学）

第58回国際大会は、2019年8月28日（水）、29日（木）、30日（金）の3日間、『「ボーダーレス」の先に―変革する社会における英語教育』という大会テーマのもと、愛知県名古屋市にある名古屋工業大学にて開催されました。今回の国際大会においては、AILA より会長の Daniel Perrin 氏、財務担当の Marlies Whitehouse 氏をお迎えするとともに、ほかに Angel M. Y. Lin 氏、田地野彰氏をお迎えし、3つの基調講演を行いました。また、2つの全体シンポジウムのほか、Paul K. Matsuda 氏による特別招待講演、1つの国内特別招待講演、中部支部企画による2つの特別シンポジウムが開催され、大変多くの方々にご参加いただきました。さらに、JACET の海外提携学会の代表による8件の招待講演による基調講演、2件の特別企画シンポジウム、1件の特別委員会報告ポスター発表、2件の特別企画ワークショップ、4件の賛助会員特別シンポジウム、1件の特別賛助発表、7件の賛助会員発表、4件の Doctoral Thesis ポスター発表、6件のグローバルポスター発表、21件の SIG 研究会ポスター発表、10件の外部試験ポスター発表、6件の ESP 産学連携ポスター発表が行われました。また、今回の大会で初めて、海外からの発表者に対して Travel Grant が授与されました。受賞された方々、おめでとうございました。皆様のご協力もあり、今回の国際大会にはたくさんの会員の方々に発表の申し込みをいただき、94件の一般発表、6件のワークショップ、7件のシンポジウムの申し込みをいただきました。参加者は742名となり、盛会のうちに無事に終了することができました。大会終了後に参加者から大会アンケートなどを通じまして、大会運営あるいは企画に関しまして様々なご感想、ご助言、ご意見を頂きました。ありがとうございました。お寄せいただきましたご助言、ご意見を参考にし、次年度以降の国際大会の運営の仕方を改善していくとともに、より興味をひくような魅力的な企画を練っていく予定です。最後に、今回の国際大会を実際に運営していただきました、中部支部大会実行委員長の石川有香先生、ならびに中部支部の実行委員の先生方には、大会運営にご協力いただきありがとうございました。さらに大会の企画運営に携わった、国際大会組織委員会本部委員会委員の各位に心より感謝申し上げます。

講演・シンポジウム

*要旨については、原則として、大会要綱に記載されたアブストラクトを転載しております。

【基調講演１】

Beyond disciplines, domains, and languages: Theory and practice of applied linguistics in, with, and for a changing society

Daniel Perrin
(Zurich U. of Applied Sciences, AILA President)

Marlies Whitehouse
(Zurich U. of Applied Sciences, AILA Treasurer)

Transgressing boundaries between disciplines, research fields, and epistemologies has long been considered a promising way to get to grips with real-world problems and to "accommodate and understand the fluidity and flexibility required to embrace diversity" (JACET 2019 Conference outline). Starting in the early 1960s in pedagogy and natural sciences, key concepts of transdisciplinarity have developed into drivers of applied research in social sciences and, more recently, in applied linguistics.

On closer examination, however, it becomes obvious that principles of transdisciplinarity, such as translating between academics' and practitioners' languages (Maguire, 2015), have always been at the core of applied linguistics. Understanding and critically discussing both the current state and potential directions of transdisciplinary research "on, for, and with practitioners" (Cameron et al., 1992, 22) can help us develop sustainable solutions to socially relevant problems (Perrin, 2018).

Based on two decades of text production research in professional settings such as education, but also media and finance and their "language of numbers" (Whitehouse, 2018), this keynote presents and critically discusses key principles of transdisciplinary research in applied linguistics.

Findings show that combining applied linguistics with transdisciplinarity can result in advantages on two levels: From a product perspective, collaborating with practitioners benefits both practical and theoretical outcomes. From a process perspective, applied linguists' knowledge of mediating between languages enables and intensifies collaboration throughout research projects. This fosters mutual learning – and contributes to positioning applied linguists as strong players in mixed research teams facing a rapidly changing, 'trans' paradigmatic world.

【基調講演２】

ELT Research Revisited: A Soft Systems Approach

Akira Tajino
(Nagoya U. of Foreign Studies)

ボーダーレス時代の到来により、いま英語教育研究のあり方も問われている。さらなる発展にむけて、本講演では、英語教育研究を体系的に捉え直すべくシステムズアプローチを用いた試みを紹介したい。

英語教育研究は、言語学や教育学、心理学など、さまざまな学問領域と関わりながら、語彙研究、文法研究、学習者論、教師論、授業研究、ESP 研究などによって構成されている。たとえば、本学会（JACET）には約 50 もの研究会（SIG）が存在している。各研究会においては、活発な議論や調査研究が行われ、その成果は国内外の学術誌や専門誌、研究大会をとおして発表されている。一方で、研究会同士の交流にはいまだ発展の余地が残っている。個々の専門分野の細分化は、JACET の研究会に限らず、学問の深化においてある意味当然であろう。しかしながら、英語教育研究は本来、学際的な性質を有するものであることから、分野間交流のより一層の活性化が望まれる。近年では、研究者間の交流にとどまらず、産官学連携や学会連携をも目指す JAAL-in-JACET 学術交流集会といった新たな交流の動きも見られる。

こうした多様な交流においては、創発特性が期待できるような連携のあり方が問われることになる。本講演では、さらなる学際性の質的向上にむけて、英語教育研究を俯瞰的に整理し、捉え直したい。具体的には、複数の関与者による意思決定のための有効な手段とされるソフトシステムズアプローチを用いて、新しい連携、協力体制のあり方について論じたい。加えて、英語のカリキュラムや教育文法の開発におけるシステムズアプローチの導入例も紹介する予定である。

【基調講演３】

Translanguaging and Multimodal Approaches to Content and Language Integrated Learning (CLIL): Innovating with the Multimodalities-Entextualization Cycle (MEC)

Angel M. Y. Lin
(Simon Fraser U.)

Content and Language Integrated Learning (CLIL) is a rapidly growing area of research and practice in many parts of the world, especially in Europe and Asia where many schools and universities are using CLIL as a way to integrate content learning with the learning of English-as-an-additional language. However, how do we help students to make 'alien' words and foreign ways of speaking/writing/thinking in foreign/additional languages/academic registers their own? In this presentation, I shall describe how translanguaging (Garcí and Li, 2014) and multimodal approaches (Danielsson, 2016) can facilitate students' expansion of their communicative repertoires to gradually make foreign ways of speaking/writing/registers their own. I shall discuss how teachers can design spaces for translanguaging and trans-semiotizing (Lin 2015) and spaces for target language/register use in the different stages of a curriculum genre (Rothery 1996). The Multimodalities-Extextualization Cycle (MEC) was proposed as a specific curriculum genre to achieve this aim (Lin 2015, 2016). While Stages 1 and 2 in the MEC allow for the uninterrupted flow of meaning-making and

pedagogical support through translanguaging and trans-semiotizing, the third stage allows students to have a space to practise orienting their meaning making towards the discourse and cultural patterns required by the school and academia for successful participation in future assessment tasks and for expanding their communicative repertoires. In this stage, scaffolding needs to be provided (e.g. useful vocabulary, sentence patterns, writing/speaking starters). The MEC in principle can be reiterated without an end-point to emphasize the equal importance of all the multiple linguistic and multimodal resources. The MEC is thus proposed as a heuristic tool for CLIL educators to think about how to design systematic scaffolding in Content-based language education and CLIL classrooms.

【特別招待講演】

Writing Assessment Literacy for the Classroom

Paul Kei Matsuda
(Arizona State U.)

Assessment literacy is important not only in evaluating student performance but also in facilitating students' language and literacy development. The discussion of writing assessment, however, tends to be based on assumptions for large-scale testing. In this presentation, I will discuss the importance of developing writing assessment literacy specifically for the classroom in order to maximize student learning. I will begin by providing a general overview of assessment literacy, followed by the discussion of writing assessment literacy that is commonly presented to teachers. I will then consider the difference between standardized test of writing and classroom assessment of writing. Finally, I will present various strategies for classroom writing assessment that can reduce the workload for the teachers while increasing instructional effectiveness. Some of the strategies include the use of primary trait grading, broad scoring, and frequent and low-stakes assessment. This presentation will conclude with an interactive Q & A session.

【全体シンポジウム１】

JAAL-in-JACET Symposium Applied Linguistics Today

Chair: Chitose Asaoka (Dokkyo U.)
Daniel Perrin (Zurich U. of Applied Sciences)
Paul Kei Matsuda (Arizona State U.)
and Masaki Oda (Tamagawa U.)

Since its establishment as an AILA affiliate representing Japan, JAAL-in-JACET has been playing an important role in promoting applied linguistics in Japan, including the 12 AILA World Congress at Waseda University JACET hosted in 1999. Commemorating the twentieth anniversary of the first AILA convention in Asia, the panelists will

reflect on the developments of applied linguistics in Europe, North America and Japan with a special attention to (but not limited to) the following issues;

1)Applied Linguistics and its interdisciplinarity.

2)English Language Teaching and Applied Linguistics

3)Fostering applied linguists in a changing society.

Each panelist will give 20 minutes presentation focusing on the three issues, and discuss the role of applied linguistics in society and hope to come up with the direction JAAL-in-JACET will follow in the next decades.

【全体シンポジウム２】

Borderless English education using ICT: What English teachers can do in the cloud and AI computing era?

Chair: Manabu Yoshihara (Tokyo Keizai U.)
Atsutomo Shinada (VERSION2 Inc.)
Masayuki Murakami (Osaka U.)
Yukinari Shimoyama (Toyo Gakuen U.)

情報機器の発達に伴い、英語教育は陰に陽にその影響を受けてきた。教室の中でインターネットを使い、動画で生の英語を伝えたり、海外とリアルタイムで英語のやり取りをしたりすることはもはや特別なことではなくなっている。このような形で情報機器やICTは英語教育の教材的な使われ方をされてきたが、現在の情報技術を取り巻く世界で起こっていることは英語教育のみならず、教育そのものを大きく変える可能性を有している。たとえば、スマートスピーカーといった人工知能を活用したコミュニケーション機器の登場は、会話ができるのは人間のみという、これまでの暗黙の常識を破壊する力を秘めている。また、コンピュータが学習者の英語を評価する自動採点や、オンライン学習のデータからクラス全体だけでなく、個人の学習傾向などを判断して苦手な分野を指摘するようなクラウド型のサービスまで、さまざまな技術やサービスが生まれつつある。

これから英語を学ぶ若い学生側は ICT に生まれた時から親しみ、柔軟に対応している一方、英語を教える側の教員の状況を顧みると、その対応は必ずしも理想的な状況とは言えない。もちろん、新しい技術を積極的に取り入れることは良い面ばかりでもなく、技術の発展に合わせて教え方を変えることが最善というわけでもない。

本シンポジウムでは、このような最新の技術動向や環境の変化について紹介し、英語教育の内外で起こっている先進的な教育活動を参考に、これからの英語教員が身につけるべき技能や知識について議論を深めたい。まず、大学英語教育を取り巻く ICT の変化と将来の展望について株式会社 VERSION 2 の取締役、品田淳智氏に紹介いただく、つぎに、教育工学の立場から大阪大学の村上正行先生に、これら ICT を教育に導入した事例を通して、その利点や気をつけるべき点などについて説明いただく。最後に、英語教員の立場から東洋学園大学の下山幸成先生に、ICT を活用した実践紹介と、これからの英語教員が身につけるべき知識や技能を提言いただく。最後に、登壇者同士やフロアとの議論を通して、これからの大学教育環境と技術の変化を踏まえた新しい英語教育と英語教員のあり方について議論を行う。

【国内招待講演】

Intercultural Communicative Competence and the Evaluation of English Ability

Yoko Kurahashi
(Tokai Gakuen U.)

日本国内において異文化の人々と接する機会が近年増加してきた。日本在留外国人数は、2013 年以降継続的に増加し、2018 年 6 月には約 263.7 万人となり、アジアの人々は全体の 76.0%を占めた。県別の人数は東京都、愛知県、大阪府、神奈川県他の順に多い。また、2018 年の訪日外国人旅行者数は 3,000 万を超え、2015 年以降出国日本人数を超えた。

このような状況下において、日本人大学生が異文化の人々とコミュニケーションを図る時に問題になることは、使用言語（主として英語と日本語）に加え、異文化の人々に対する態度である。そこで、日本人大学生の異文化に対する態度の特徴を把握するために、Byram（1997, 2008）の異文化理解力（intercultural communicative competence）、Hall（1959, 1966）、Altmann（1975）、Adler（1991）他を参考に、アンケート調査を実施してきた。その結果、日本人のための異文化理解力教育の必要性が認識された。また、留学は異文化理解力に好ましい影響を与えることもわかった。

語学力に加え、異文化理解力のための教育の提案は諸外国でもなされ始めているが、より有効で持続可能な異文化理解力を日本国内で身につけるために、1）国際事情関連の授業を開設し、英語の授業内に学生間のディスカッション等を通して異文化理解力について学修する機会を導入し、2）英語の評価に従来の 4 技能に加え、異文化理解力を加えることを提案する。

さらに、学生間のディスカッション内容として、1）異文化に接して戸惑いを覚えた時に、自文化に固執していないかについて、2）明らかに不利益を被った時に、相手に伝えることについて、3）誤解があれば、その解き方について等、について論じたい。

【支部企画シンポジウム１】

English Education for Generation Z and Beyond

(Chair): Tadashi Shiozawa (Chubu U.)
Tomiko Komiya (Okazaki Women's Junior C.)
Yasumi Murata (Meijo U.)
Yasuhiro Fujiwara (Meijo U.)

「新人類」「ゆとり世代」「ミレニアル世代」などと新しい価値観や社会観を持った若者たちは呼ばれてきたが、その次にくる若者たちは「Z 世代」と呼ばれている。デジタル社会と複言語・複文化社会を生きる彼らは、すでに英語を英米の地域言語ではなく、共通語の一つとして認識している。この世代への英語教育は必然的にこれまでのものと変わらざるをえない。そのためには、特に社会言語学や国際英語論、異文化コミュニケーションの知見が重要になると思われる。そこで、このシンポジウムでは、この 3 つの観点から Z 世代を見据えたこれからの英語教育を参加者らとともに考えてみたい。具体的には、まず、Z 世代が使いこなす英語とは、どういう特徴をもつのか、Lingua Franca としての英語と日本人英語の矛盾相即的なつながりを考えたい。また、日本人英語の語用論的な特徴と文化的必然性を考え、英語教育における日本人英語の扱いについても提言する。次に「異文化理解」の授業を通して生まれる「国際英語」への気づきと「異文化リテラシー」について報告する。香港の大学とビデオによる CLIL を採りいれた異文化理解の授業を通して、学生が自文化と他文化を相対的に認識する Kramsch のいう第 3 の視点(the third place)に気づくと同時に「英語話者はネィティブスピーカーだけじゃなかった」いう国際英語への認識が生まれる様子を紹介する。最後に、国際英語論(WE/ELF)に基づく評価について、日本の英語教育現場にいかに応用するかを論じる。具体的には、社会言語学的な World Englishes (WE)のアプローチでは、英語や評価者の多様性を尊重し、語用論的な English as a lingua franca(ELF)の

アプローチでは、ELF のコミュニケーションにおける調整力、方略的能力、課題の達成度を評価する方法があることを紹介する。

【支部企画シンポジウム２】

Deep Learning vs. Deep Active Learning: New Approaches to English Education in a Changing Society

Hitoshi Isahara (Toyohashi U. of Technology)
Shin'ichiro Ishikawa (Kobe U.)

Deep Learning (DL) and Deep Active Learning (DAL) are the two keywords in the fields of engineering and education and they will give us a clue to think about a new direction in English education in a changing society. In this seminar, firstly, Dr. Isahara introduces basic ideas and concepts behind DL and Artificial Intelligence (AI), and explains current status of DL-based machine translation system, i.e. neural machine translation (NMT). Isahara also discusses necessity of second language education in the future and surveys how DL and NMT contribute to better language learning and teaching. Next, Dr. Ishikawa talks about how college English teachers can make students experience DAL in their English learning. Based on his own teaching practices, Ishikawa suggests that combination of three teaching principles, CLIL (content and language integrated learning), ELF (English as a lingua franca), and CL (cooperative learning) leads students to think more critically and creatively about various topics around them. Following two talks, we have a Q & A session and discuss what DL/ DAL can do and what they cannot do for language learners.

【海外提携学会招待講演１】

Gamifying Grammar Games (3G) for Language Learning: Engaging Students in Learning through GIGvaganza (Get into Grammar) in ECER Programme

Noor Azlinda Zainal Abidin
(Universitiy Malaysia Pahang, MELTA)

Gamifying in language learning is not something new in English language teaching. Teachers have put much efforts in ensuring fun learning is created to motivate students in learning. Learning thus does not end in the classroom but it has to be done outside class hours as well. In engaging the students in language learning, GIGvaganza was introduced as one of the modules for Empower Programme which was funded by East Coast Economic Region (ECER). The study was carried out to find out the impact of this programme towards the students in Kuantan district who are involved in this programme. Interviews were conducted to students and teachers in schools after the completion of the programme and it was analyzed by using thematic analysis. Results have shown that GIGvaganza has a positive impact on students' learning. GIGvaganza does not only assist learning in Grammar but holistically, it changes their view on learning as learning itself becomes more meaningful with GIGvaganza.

EFL Learners' Activity Involvement with Online Translation Learning System

Yulin Chen
(Yuan Ze U., ETA-ROC)

This study aims to investigate if utilizing online translation learning system in an English-Chinese Translation course could increase students' activity involvement. Participants were EFL college leaners who major in English in a University in Taiwan. Theories guiding this investigation included Social Constructivist Approach and Cooperative Learning to describe language learners' learning attitude and their activity involvement. A 5-point Likert-scale questionnaire was used to collect the data. The questionnaire data was analyzed quantitatively to explore the students' English to Chinese translation activity involvement of Taiwanese undergraduate students, and the correlation between their online cooperative learning experience. The researcher conducted correlation coefficient and regression analysis to analyze the data. The final data indicates utilizing the online translation learning system has positive and significant correlation with students' activity involvement. This final analysis could also act as one of the exploratory studies for researchers who are interested in the field of translation teaching and learning. Hence this study could also provide a guideline for EFL instructors to offer more pedagogical implications to benefit learning experience and enhance the learning involvement of EFL students in translation courses.

A Study of Repair Sequences and the Use of 'Okay' in Pre-teachers' TETE (teaching English through English) Mock-teaching

Jina Lee
(Sangmyung U., ALAK)

This is an on-going discourse analysis of pre-teachers' TETE mock-teaching. TETE mock-teaching is a required course activity in an English teacher-training program at a college of education in Seoul, Korea. The goal of this research is to investigate how the students in pre-service teacher training course are structuring their discourse and monitoring themselves in mock-teaching activities. Therefore, my analysis mainly focuses on the pre-teachers' talk rather than the potential students' talk. The fifteen-minute mock-teaching activity of each student was video recorded. Ten video recorded data were randomly chosen for this research, and transcribed adopting conversation analysis conventions. In mock-teaching, the student performing mock-teaching acts as a teacher, and other students listening to the mock-teaching act as the potential students of the performer, i.e. the pre-teacher. The outstanding interactional structures in the data were repair sequences, repetition, and reactive expressions. First, most of the repetition patterns were found as a pair part of repair sequences, and the main function of repair sequences was analyzed as a self-monitoring action of the pre-teachers. Although the discourse data was not a genuine type of classroom interaction, Vygotskin regulatory functions appeared throughout the data, that is, other- and self-regulatory functions of language. Second, 'okay' was the most frequently observed type of reactive expressions. Four structural and interpersonal functions of 'okay' were found as follows: (1) signaling speaker designation in turn initial position in brief vocalization with falling pitch; (2) checking student(s)'s comprehension and encouraging of class participation in Q-A sequence or in turn final

displaying prolonged rising tonal contour; (3) functioning as a negative feedback in other-initiated repair sequences with rising tonal contour; and (4) closing the current action or class activity and opening the next action or teaching points.

Infusing a Global Competence Perspective into Your Curriculum

Wayne Anthony Malcolm
(Fukui U. of Technology, JALT)

Japan's businesses are demanding more from universities in how the higher education system develops global human resources (global jinzai) ready to compete in a vigorous international marketplace. This presentation highlights the need to define and assess the global competence of these human resources who will be invaluable in not only shaping the growth trajectory of businesses, but also the future of Japanese society. Along with describing the term global competence, the presenter will discuss ways to infuse a global competence perspective into the curriculum of college and university language programs. Language teachers in general have a particular responsibility because being a globally competent person requires proficiency in a foreign language. English being a lingua franca for business, commerce, science, travel, etc. means that English language programs should be aware of global competence and how to create classes, materials, and curriculum programs that incorporate the tenets of this concept/set of skills. The information in this presentation is based on a qualitative instrumental case study that was completed at a Japanese national university that received a five-year grant for curriculum reform that included changes to the English language program, and methods of encouragement for students to study abroad. Interviews were done, documents collected, a survey given, and literature reviewed. One of the main research questions was if businesses valued study abroad as a means to create globally competent recruits ready to help businesses succeed. Another avenue of inquiry was how students who studied abroad for one-year understood the term global competence. In both cases the conclusions were varied and pointed to indifference more than anything else. Through interviews with participants it was clear that the university was not using any understanding of global competence as a guiding tool when implementing changes to curricula or study abroad programs. The hope is this presentation will be more of an interactive discussion where the presenter and participants can exchange experiences and ideas regarding global competence and how to effectively incorporate the concept and skill sets into programs.

Lexical bundles in ESL science and engineering prospective students' writing according to proficiency levels

Daehyeon Nam
(Ulsan National Institute of Science and Technology, KATE)

Recently, second and foreign language teaching practitioners and researchers have become increasingly interested in the creation of learner corpora and the pedagogical use of them. Studies have shown that learner corpora have made a significant contribution to second language

acquisition research. In tandem with the recent attention to EAP in higher education, the analysis of the L2 writers' writing within academic context has been one of the focuses of corpus studies. However, there are few studies about the writings of college students whose majors are within specific academic disciplines, for example, science and engineering. The purposes of the current study, therefore, is threefold: (1) creating an L2 writing corpus of science and engineering college students; (2) identifying structural and functional characteristics of the writings according to the students' proficiency levels; and (3) suggesting pedagogical implications of writing instructions for the science and engineering students. To create the study corpus, argumentative essays of placement tests contributed by Korean college students who are accepted to a science and engineering institution are collected. The essays are graded based on a standardized test rubric to be able to compare and contrast the writing characteristics according to the students' proficiency levels. Specifically, to identify the stylistic characteristics and discourse organization of the writing, the distribution of structural and functional lexical bundle categories is examined. Then a series of statistical analyses of the lexical bundle frequency is conducted to confirm any similarities and differences, if any, among the writings of the prospective science and engineering students. A pedagogical and pragmatic implication can be also suggested to improve L2 writing quality: the use of hedging; overstating tone; proper use of lexical bundles for the proper argumentative writing.

English Education in the midst of Drastic Change in Thailand

Paneeta Nitayaphorn
(Thai Airways International (Plc.) Co. Ltd, Thai TESOL)

Over the years, a huge surge of exceptional changes has been swept through ELT communities. With a great influence of technological evolution along with the globalization of English language, we, educators and practitioners, have been forced to re-define the concept of language learning and teaching and to creatively design and develop effective teaching and learning platforms to overcome diversities and reassure of quality language education. It is to thrive on cultivating our young generations to be globally competitive and to prepare them for a unique demand of an unpredictable dynamic of the borderless futuristic world. Thailand is one of the countries in Asia that the government has immensely emphasized on the necessity of education which leads to substantial reform of the entire system. Apparently, English language teaching and learning is one of the essentials of the reform roadmap which teachers' professional development is truly prominence. Therefore, an enormous amount of budget has been invested on initiatives and projects which are to catalyze the increase of competitiveness ability and the degree of learning achievement of young generations, as well as to assist ELT teachers to effectively respond to the challenge and efficiently handle the speedy change. Nonetheless, the readiness of ELT teachers to face the complexities of the change which truly affects language teaching and learning process, the abrupt rectification of

national education policy, the unique characteristics of learners' generations in dealing with learning, and the reaction of the parents towards the transformations of teaching and learning means and practices remain questionable. In the session, a portrait of an overview of current ELT situations in Thailand will be illustrated. Also, policies and some of initiatives and projects which have been reinforced into the system will be discussed.

Educating English Major Undergraduates for Their Future Development: A Chinese Model

Lianggong Luo
(Central China Normal U., CELEA)

The running of undergraduate programs for English majors in non-English speaking countries usually involves a controversy over its objectives: to develop students' ability in using the language as a tool, especially in using the language for special purposes, or to enhance their quality in arts and humanities, or to enable students to meet the career requirements immediately after graduation with a BA. A survey of Chinese history of the undergraduate English major program demonstrates that different objectives have led to different orientations of undergraduate English major programs as vocational training or academic education, as one of the students' developing stages or the one-for-all academic training in terms of students' academic and career development. Chinese colleges and universities are now endeavor to re-position the undergraduate English major program as a basic academic phase for students' future learning through career or further academic study. This helps distinguish the undergraduate English major program from vocational training and graduate school, and gives an answer to the question: how can the undergraduate program for English majors interact to the students' future career and further education as graduates in or out of fields based on English. This paper proposes a humanities-based and future-oriented educational model for the undergraduate English major, and believes that the undergraduate program for the English major shall be based on the integration of students' language ability development and their humanities quality enhancement. These two are equally important for the students' future development while humanities shall be used as drive for students' English ability development, and thus a content-based or humanities-based educational model instead of language ability-oriented model shall be encouraged. Therefore, it is necessary to re-examine the designing of the curricula and courses and course books to match the major orientation. This paper will also refer to some cases to illustrate the theory and practice in the reform of the undergraduate English major in China.

Englishes in TESOL teacher-education programme: From the Unequal Englishes perspective

Roby Marlina
(SEAMEO-Regional Language Centre, RELC)

It has been widely established that the global spread of English and the status of English as an international language have challenged the monolithic conceptualisation and perspective of English, its user, and its culture. English is now

conceptualised as a plurilithic language, used by people from diverse lingua-cultural backgrounds who naturally bring their own linguistic practices, resources, and cultural norms into their use of English. In response to this, applied linguists have called for the urgent need to raise teachers' awareness of different varieties of world Englishes. Recently, many TESOL teacher-education programmes have attempted to incorporate a topic, a module, a course, or even an entire programme on World Englishes (WE), English as a Lingua Franca (ELF), English as an International Language (EIL), or Global Englishes (GE) (Marlina, 2014; Matsuda, 2017). Although some empirical studies have, to a large extent, revealed the positive impact of being engaged in a WE/ELF/EIL/GE-oriented lesson, course, or programme on pre-/in-service teachers' perceptions/attitudes towards world Englishes and their users, the ways in which these Englishes are constructed still remain critically unexplored. This paper, undergirded by the Unequal Englishes perspective, attempts to explore how those Englishes are constructed by in-service teachers in a TESOL professional development program from a particular educational institution in Singapore. Since English language education provides a pedagogical space in which linguistic, cultural, social, and racial differences meet, this paper argues that the ways in which these Englishes are 'unequally constructed' or 'politicised', need to be taken into consideration in TESOL teacher education programmes that aim to raise awareness of the pluricentricity of English and its users.

【特別賛助シンポジウム（英検・IIBC・CUP）】

How To Foster Students' English Skills For Study Abroad

Yuichi Nishijima (Kanazawa U.)
Yuichi Tagane (Akita International U.)
Hirobumi Matsumoto (Tamagawa U.)
Shuken Shiozaki (Eiken Foundation of Japan)

2020 年を見据えた留学生倍増計画の下、トビタテ！留学 JAPAN、スーパーグローバル大学、スーパーグローバルハイスクール等、グローバル人材育成を目的とした留学推進の動きが活発化したこともあり、短期を中心に大学生の留学 は増加傾向にある。この過程の中で、国際化に舵を切ってきた大学は様々な留学制度を用意し、その中には全員留学を必須とする学部を持つ大学も多くなった。学生を留学に向かわせない三大障壁と言われてきた、「経済的理由、内向き思考、英語力不足」のうち、本シンポジウムでは留学に必要な英語力をどのように育成するかについて、先進的な取組みを行っている三大学からスピーカーをお招きし、その成果と課題を考察する。

Students and the TOEIC ® tests contents: comparison with the Course of Study, and investigation based on past test results

Satoko Shimoyama
(The Institute for International Business Communication)

TOEIC® Program の各テストは、オフィスや日常生活における英語によるコミュニケーション能力を幅広く測定するテストとして発展、拡大し、2018 年度の総受験者数は公開テスト、団体特別受験制度（IP テスト）合わせて 266 万人を超え、受験者及び受験の目的も多様化してきている。

本発表では、TOEIC ® Listening & Reading test (L&R) 及び TOEIC ® Speaking & Writing tests

(S&W) で出題される問題を様々な視点から分析を行い問題の特性と受験者の知識・経験が及ぼす受験結果への影響を検証する。まずL&R、S&Wについて、オフィスや日常生活における英語によるコミュニケーションの力を測定するテストとして制作されている両テストと学習指導要領を比較することで、高等学校での学習内容との関係性を示す。さらにL&Rについて、受験者のバックグラウンドがテスト結果へ影響を与えるのかを検証するため、大学初年度の学生（職務経験なし）と社会人受験者（職務経験あり）の受験結果データを複数の観点から検証を行った。今後のより幅広い調査や分析の可能性も含めて検討を行った結果を報告する。

Partnering with a CEFR-based global brand

Tomoe Aoyama (Cambridge Assessment English)
Tomomi Katsuki (Cambridge University Press)

昨年度のシンポジウムでは、小・中・高・大の接続を考えましたが、今年は大学と社会人の接続の観点から、グローバルスタンダード（CEFR）のベンチマーキングを例に第一部として、世界の航空業界の具体的事例をご紹介します。第二部では、航空業界でB2以上が求められている職種にスポットをあて、大学でB2、もしくはB2以上の英語力の育成に必要なものは何か、例えば、同一タスクにおけるパフォーマンスの機能分析に示された、Teens と Adults 間にみられる違いの例など、ケンブリッジ・アセスメントの研究者の発表にヒントを得て、言語的、社会的および認知的発達段階の主なアウトカムのまとめから見える「高等教育でB2の語学力に達するのに学生は何をすべきか」について考えます。

第三部では、第二部でお話しした「B2 の語学力」の育成をサポートするマテリアルについてお話しさせて頂き、「日本の大学生はB2以上の語学力がある」と世界に向けて発信できる未来を会場の皆さまと共に模索したいと思います。

【特別企画シンポジウム（10年後・４技能）】

Next Ten Year's Education

Hirofumi Matsumura (EnglishCentral KK)
Katsuo Hada (SEIBIDO PUBLISHING CO.,LTD.)
Kumiko Obino (Interact Japan, Inc.)
Yuki Toyono (CHIeru Co., Ltd)

現在、ICT（情報通信技術：Information and Communication Technology）の急速な発展に伴い、教育現場におけるICTの活用は、21世紀型の新しい学習には欠かせないものになっている。しかし、「現在 ICT が英語教育現場でどのように活用されているのか」、「ICTを活用した、最適な学習スタイルとは何か」、「ICTに最適な教授法とは何か」など、体系的にわかりやすく説明がなされていない状況のように見受けられる。今回のシンポジウムは、そのような質問に答えるものとなる。Session 1 では、成美堂の羽田氏と EnglishCentral Japan 社長の松村氏に、現在のICTを活用した学習・教育の現状、そして導入における注意事項を含む導入までの及び導入後の流れを語って頂く。Session 2 では、チエル株式会社の豊野氏とインターアクト・ジャパン社長の帯野氏に、同じテーマで語って頂く。Session 3 では、4名のシンポジストに、「3年後、5年後、10年後の英語教育はどのようになるのか」を語って頂く。

Four Skills Assessment

Chair: Naoko Ozeki (Meiji U.)
Fumihito Ando (Waseda U.)
Norifumi Ueda (Komazawa U.)

大学入試において、外部検定試験を導入した大学は急速に増えつつある。本シンポジウムでは、すでに数年前から外部英語検定試験を入試に取り入れてきた早稲田大学文化構想学部、現在導入され2年が経過し、さらにその利用を拡大しようとしている明治大学国際日本学部、全学部統一試験のみ4技能試験を取り入れている駒澤大学という、それぞれ導入形式や方法が異なった3大学における4技能試験の活用状況を報告する。

4技能試験を取り入れる場合、様々な形態が考えられる。例えば、早稲田大学文化構想学部では、別枠、通常方式との併願可という方式、明治大学国際日本学部では、同枠、みなし満点の方式を取り入れている。また、受験者たちが実際に使用している外部試験はどのようなものが多かったのか、どのレベルを考えればいいのかなどを考えていく。さらには、4技能試験で入学した学生たちの入学後の成績や学習態度にも言及する。

今後、2020年からは、大学入学共通テストが開始され、これにより、登壇者の大学の入試も変化する予定である。シンポジウムの参加者が今後、どのように入試が変わっていくのかを考え、それぞれの大学にふさわしい入試を考える機会になることを期待している。

【特別委員会ポスター】

Special Committee Poster Presentation
全国都道府県英語教育研究テーマの調査研究特別委員会

１．都道府県・政令市における英語教育研究テーマに関する実態調査
JACET Kanto Chapter Special Research Project A: English Education Policy and Vision by the Boards of Education in Japan

昨年度行われたJACET関東支部特別研究プロジェクトAの成果報告を行う。本調査の目的は、英語教育の向上に向けて各都道府県・政令指定都市（以下、自治体）がどのような方針を立て取り組んでいるのかを把握し、それを全国の自治体に共有することで、多角的に日本の英語教育を全般的に向上させることである。そのため各自治体の教育委員会を対象に1）各学校や市区町村等に対する指導・助言の方針をどのように設定しているか2）児童・生徒、および英語教員へはどのような指導・研究を行っているかについて質問紙調査を実施した。収集したデータから各自治体が掲げる英語教育の方針や教育政策についての傾向が明らかになり、さらには、英語教員に関する自治体の共通認識において、英語力と指導力についての問題点が浮き彫りになった。本調査の結果をもとに、日本全国の自治体における英語教育政策に関する取り組み、及び高等教育機関が担う初等中等教育への影響等について議論する。

２．大学における英語教員養成コアカリキュラムの実態調査
JACET Kanto Chapter Special Research Project B: Teacher Educators' Prospects on the Core Curriculum at Japanese Universities

昨年度行われたJACET関東支部特別研究プロジェクトBの成果報告を行う。本研究の目的は、2019年度から実施されるコアカリキュラムの求める到達目標に対する大学の英語教職課程担当者の見解を量的・質的観点から把握することである。中学校・高等学校教員（英語）の一種免許資格を通学課程によって取得可能な全国の306大学にアンケート調査を実施した（回収率49%）。また、小学校の英語教職課程を有する場合には、小学校教職課程についても回答を依頼した。調査内容としては、各到達目標について、

履修生の多くが卒業までにどの程度到達すると見込めるかを 5 件法で尋ね、自由記述欄に回答を求めた。中・高等学校の教職課程では全 37 項目を、小学校の教職課程では全 26 項目を尋ねた。分析には、記述統計からの分析とクラスタ分析を用いた。その結果、中・高等学校の教職課程では、3 つの因子により特徴づけられる 4 つのクラスタが見いだせ、27%が到達目標を達成できると考えていることが判明した。小学校の教職課程では9%が到達目標を達成できると考えていることが判明した。自由記述の回答の質的な分析からは、観点ごとに問題、課題、大学の対応を整理した。小学校の教職課程では、「外国語指導法」「外国語に関する専門事項」、中・高等学校の教職課程では、「英語科指導法」「英語科に関する専門事項」といった観点から整理した。

【本部企画特別ワークショップ１、２】

How to Write Qualitative Research Papers: An Introduction

Masuko Miyahara (International Christian U.)

Generally speaking, qualitative research in applied linguistics and language learning research has gained much prominence over the past few decades. Contrary to this popularity, however, both novice and experienced researchers struggle in their attempts to transfer the rich data of their research experiences into written product. This workshop thus pays particular attention to the writing part of qualitative research. Rather than focusing on, for instance, how to plan, collect or analyze data, the workshop aims to provide some practical tips on how to write about these areas in the qualitative paradigm. In this introductory session, the primary focus will be on how the principles of doing qualitative research are realized in the writing process, the structure and the organization of the paper.

An Exploration of Motivating Factors of Japanese College EFL Learners to Promote Learner Autonomy with ICT Facilitated Tasks

Joint Researchers:
Shingo Matsumiya (Otemon Gakuin U.)
Emi Davis (Otemon Gakuin U.)
Mariko Matsubara (Otemon Gakuin U.)
Megumi Hara (Otemon Gakuin U.)

This study is a pedagogical assessment and evaluation of the effectiveness of e-learning courseware, ABLish, developed by Chieru Co., Ltd. ABlish offers up-to-date English news three times a week and a library of over 7000 news articles from the previous five years. It also hosts various communication platforms for learners. Otemon Gakuin University has been using ABLish as a part of EFL teaching/learning resources and has found that it increases students' motivation and autonomy in their English learning.

As the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology (MEXT) in Japan has been vigorously encouraging all educational institutes to provide learners with more active learning opportunities, it is necessary to measure the value of utilizing learning courseware such as ABLish.

It is also important to address how such learning courseware can enhance learners' motivation from the viewpoint of utilizing ICTs in EFL classes since this is another skill that learners are expected to develop.

The study employs a pre-and-post questionnaire survey to assess how learners' attitudes towards English learning changes throughout the Spring semester in 2019 in selected classes at Otemon Gakuin University. ABLish will be an integral part of the EFL learning material. As a comparative measure, an equivalent number of classes will be taught via a conventional textbook approach and will be assessed with the same questionnaire.

【賛助会員特別発表 (English Central)】

The development of an online-vocabulary program that ensures vocabulary review with expanding test ranges and self-scoring speaking and spelling tests.

Stuart McLean (Osaka Jogakuin C.)

Nakata (2011) lists design features that empirical research suggests contribute to ideal vocabulary learning. While research can inform classroom activities, implementing research fi ndings in pedagogical settings is often problematic. This presentation describes the creation and implementation of a research-based institution-wide vocabulary learning program that integrates online out-of-class learning with in-class self-marking spelling and speaking vocabulary tests. The presentation also describes the steps taken to overcome the implementation challenges experienced.

The online vocabulary program allows teachers to select the range of vocabulary which students study over a semester or academic year. Teachers can also select general English and/or specialized word lists for learners to study. In line with research findings, students learn both words and phrases in context using L2 definitions, and with presentation and increasingly difficult retrieval modes using both orthographic and phonological forms.

Uniquely, the vocabulary program ensures the review of vocabulary by presenting new lexical items mixed among those that require review at a ratio of 1:4. Students can remove mastered lexical items after correctly producing the orographic and phonological form once, otherwise the program implements adaptive sequencing and spaced retrieval ensuring that learners experience multiple retrievals of lexical items.

Most critically, to motivate learners to use and review previously learned vocabulary, the vocabulary program produces weekly vocabulary tests based on an expanding test range. Each week's test range includes five items from the most recent week's new lexical items and five items from lexical items first learned in previous weeks. The online tests automatically assess students' ability to recall both orographic and phonological forms and allow teachers to download weekly tests scores.

Results show that students' knowledge of high-frequency words significantly increased. More importantly, relative to previous years' students, those who used the online vocabulary program significantly increased their knowledge of high-frequency vocabulary.

【大学英語教育学会 (JACET)
第 59 回 (2020 年度) 国際大会】

大学英語教育学会（JACET）
第 59 回国際大会（京都、2020）
The 59th JACET International Convention
(Kyoto, 2020)

開催期間：2020 年 9 月 8 日（火）・9 日（水）
・10 日（木）
会場：同志社大学新町キャンパス
住所：〒602-8580 京都市上京区新町通今出川上ル近衛殿表町 159-1
大会テーマ：英語教育における「ウエルビーイング」
―学習者、教師、社会の可能性を拓く―

"Well-being" in English Education: Discovering the Possibilities for Learners, Teachers, and Society

講演者：
1. Ema Ushioda （ウォーリック大学）
2. Le Van Canh （ベトナム国家大学ハノイ校）
3. 向後千春（早稲田大学）

大会要旨：

学びは何のために存在するのか。それは「学ぶ」ことで人が幸福、「ウエルビーイングの状態」になるからである。人に幸福をもたらす学びの行為主体者(agent) は、「社会」の中に位置付けられた「学習者」であり、また「教師」でもある。日本や多くのアジアの国々のような EFL の環境においても、外国語学習の機会は多様化しつつあるが、主たる学びの場は教室であり、その学びのコミュニティーの中で学習者と教師が共に学び成長することが重要となる。そのような教育を目指して数多くの外国語教育研究や授業改善の取り組みが行われてきたことに疑いの余地はない。

近年、外国語教育関連分野の研究の隆盛とともに、カリキュラム改革、技術革新、教育の質保証など多様な重要課題に目が向けられてきた。しかしながら、ここで今一度立ち止まり、教室における学習者と教師の学びという基本的かつ根源的な視座から、応用言語学や言語教育研究分野の諸問題を再検討する必要はないだろうか。

大学英語教育学会（JACET）第 59 回国際大会（京都、2020）では、外国語教授法、学習者心理、教育設計、教育工学、教師教育・教員養成、言語評価、カリキュラム開発、その他関連諸分野の教育・研究に携わる様々な立場の方々に参加していただき、「学習者」「教師」および「社会」という教育の原点に立ち戻る本質的なテーマについて議論を交わし、あるべき外国語教育の姿を浮き彫りにする機会としたい。

Abstract:

Why do we learn? It is primarily because learning can lead to happiness and well-being. The agents of learning who strive for this well-being are, of course, the learners and the teachers within society. In EFL contexts such as Japan and many Asian countries, though foreign language learning opportunities are diversifying, learning occurs most often in the classroom. Therefore, both the learners and the teachers should know how to learn and grow together. Much of the research in foreign language education has aimed at this lofty goal.

In recent years, as the field of foreign language education has flourished, eyes are turning towards a multitude of issues including curriculum reform, technological development, and quality assurance in education. This may be an appropriate time to stop and take stock of the developments in the fields of applied linguistics and language education and to reevaluate the basics and fundamentals.

At the 59th JACET International Convention (Kyoto, 2020), we welcome researchers and

practitioners from a diverse range of fields, such as educational psychology, methodological research, curriculum design, educational engineering, teacher education, evaluation, instructional design and more, to come together and reconsider the well-being of learners, teachers, as well as society as a whole through lively debate and to further the discussion on the nature of foreign language education.

第2回ジョイントセミナー（東京 2019）
—第46回サマーセミナー&第7回英語教育セミナーを振り返って—

淺川　和也　担当理事
田地野　彰　担当理事
渡辺　敦子　担当理事

第46回サマーセミナーと第7回英語教育セミナーを統合したJACET第2回ジョイントセミナーが、8月20日（月）から8月22日（水）までの3日間、玉川大学大学教育棟2014にて開催されました。ELT materials development and use: Linking theory and practice（これからの英語教材の開発と活用—理論と実践の連携を求めて）というテーマのもと、諸外国の教育研究機関に在籍していらっしゃる方々も含め、日本各地から約 100 名もの方々がご参加くださいました。講師として、シンガポール南洋理工大学国立教育学院からWilly Renandya先生、玉川大学から小田眞幸先生、そして熊本大学から合田美子先生をお招きし

ました。先生方のご講義は、最新の学術研究と教室内外での教育実践を有機的に結び付けたものであり、また、今後の授業実践に関する示唆に富んでおり、参加者は大変に引き込まれました。同時に、Willy Renandya先生、小田眞幸先生と参加者のディスカッションや、参加者同士での話し合いを通じて、今後の英語教材のあり方について省察的に見直す機会が得られました。

JAAL-in-JACETのポスター展示に加えて、講義の合間に9件のポスター発表が行われました。講師の先生方からすべてのポスター発表に対してコメントがあり、参加者も含め活発なやり取りが行われました。賛助会員（8社）による教材展示やポスター展示、さらにプレゼンテーションなどもあり、会場は大変な賑わいでした。

最終日には、今回のテーマに沿った分科会として7件の発表がありました。その総括として、淺川和也理事の司会のもと、合田美子先生をお招きして、内藤永理事および渡辺敦子理事によるパネルディスカッションが行われ、将来の英語教材について熱い議論が交わされました。

また、玉川大学朔風館 Cafeteria Sakufu で開催された懇親会では、和やかな雰囲気の中、参加者の方々が交流を深めていました。第1回のジョイントセミナ

ーに引き続き、吉田亞矢先生（京都大学）による美しい歌唱が華と彩りを添えてくださいました。

第 2 回ジョイントセミナーを盛況のうちに終えることができたのは、ひとえにセミナーに関わってくださった多くの方々の協働・協力の賜物です。会長の寺内一先生、事務局の保坂佳代子氏、委員長の桂山康司先生をはじめ、セミナー事業委員会の先生方、とりわけ玉川大学 ELF センターの諸先生に感謝申し上げたいと思います。本セミナーを契機に、ますます英語教材に関する議論が活発になっていくことを祈念しております。

来年度は、京都大学にて再び英語教材について第 3 回ジョイントセミナーが開催される予定です。今回のセミナーで得られた学びをさらに深化させられる機会を提供できれば幸いです。学びと乾杯のひと時を皆さまとご一緒できますことを心より楽しみにしております。

特別寄稿

Opening heavy doors with little keys

Daniel Perrin, President, International Association of Applied Linguistics

"A very little key will open a very heavy door" – this quote from Charles Dickens bedecked the abstract of JACET's 58th International Convention. What an exciting metaphor; and what a comforting and relaxing one. Little keys fit into light luggage. They can be taken everywhere and are always at hand if needed. Heavy doors, in contrast, are almost immovable. They often shelter, hide, and protect precious worlds. Behind closed doors of the heavy kind is where things happen that only few are allowed to take part in: the exclusive world, the secret one. Hence the very heavy door, the secure lock. And hence the power of keys in the hands of those who know how to use them.

How does this metaphor relate to Applied Linguistics and to JACET's 58th International Convention? The answer could be found right at the convention itself. It became tangible within, between, and beyond the presentations that attracted established and novice experts from a large variety of academic disciplines and professional fields. Excitingly enough, the terms "beyond" and "borderless" in the conference title seemed to have stimulated many participants to think out of the box. In their contributions, academics talked about learning from other disciplines and even from the practical world. In other words, opening heavy doors with the little key of curiosity.

In an academic world of increasingly specialized disciplines, with predetermined career trajectories that undisputedly lead us to knowing more and more about less and less, such curiosity may seem revolutionary. Is it sensible to spend time trying to cope with other disciplines' unfamiliar and seemingly incommensurable epistemes or to waste time on practitioners' hands-on approaches and unrealistic expectations? The answer in many of the presentations and in the panel discussion I had the

pleasure of participating in, together with Paul Kei Matsuda, Masaki Oda and Chitose Asaoka, was a clear "yes, but …". Yes, we can and should do so, but we have to be prudent, for at least three reasons.

First, addressing real-life problems that call for sustainable solutions requires thorough collaboration beyond disciplines and domains, which always takes time, patience, and creativity. Second, the apparent incommensurability between the epistemes of complementary disciplines and domains can only be overcome by developing shared understanding, concepts, and, languages – an absolute precondition for mutual learning. And third, such collaboration cannot be added to research projects in the very end, as a dissemination phase in which the knowledge generated is finally transferred to the practical world. Instead, it must be placed at the very beginning of a project, while defining the problem.

There is a little key to open the heavy doors to other disciplines and domains and their secret and alien epistemes. It was forged in the early 1970s, then indurated in the chalybeate bath of hard sciences and their rigor and scrutiny, and finally polished by social sciences and their constructivist criticism. This key is called transdisciplinary research (e.g., Perrin & Kramsch, 2018). Excitingly enough, it comes with theoretical knowledge of how to sustainably address socially relevant problems, and relaxingly enough, it includes methods to overcome borders between epistemological kingdoms. Using the example of English education, JACET has picked up this very key. A wise move indeed when facing the challenges of a changing society.

2019年度JACET賞

2019年度のJACET賞については、厳正なる審査の結果、論文部門で授与が決定いたしました。また、新人発表部門は、第58回（2019年度）国際大会での発表が審査対象となり、受賞者が決定いたしました。

第58回（2019年度）国際大会の会期中に、上記2部門の表彰式が行われました。各賞の受賞者と対象業績は下記のとおりです。受賞者の方には心よりお喜び申し上げます。

大学英語教育学会賞論文部門
受賞者：卯城祐司（筑波大学）、濱田彰（明海大学）、森好紳（白鴎大学）、細田雅也（東京都市大学）、多田豪（東邦大学）、神村幸蔵（筑波大学大学院生）、大河原にじ香（株式会社ビズオース）
対象業績：論文 "Goal-Oriented L2 Reading Processes in Maintaining the Coherence of Narrative Comprehension" (JACET Journal No. 62 (2018), pp.109-128)

大学英語教育学会賞新人発表部門
受賞者：福田晶子（立教大学大学院生）
対象業績：研究発表 "Changes in Learner Beliefs in Self-Regulated Learning: A Case Investigation of an English Self-Study"（大学英語教育学会（JACET）第58回国際大会（名古屋、2019） 2019年8月28日発表）

（JACET賞運営委員会）

2019年度JACET名誉会長賞

大学英語教育学会では、第55回（2016）年度国際大会より、一般ポスターセッションにおいて、最も優れた発表に対して、名誉会長賞を授与しています。2019年度のJACET名誉会長賞は、第58回国際大会（名古屋、2019）において、一般ポスターセッションの発表を厳正に審査し、受賞者が決定いたしました。受賞者と対象業績は下記のとおりです。受賞者の方には心よりお喜び申し上げます。

大学英語教育学会名誉会長賞
受賞者：柏木哲也（北九州市立大学）
発表タイトル："Longitudinal and Latitudinal Analytic Research on Entrance Exam Texts in Japan, South Korea, and Taiwan"（大学英語教育学会（JACET）第58回国際大会（名古屋、2019） 2019年8月28日発表）

トラベルグラント受賞者の言葉

Research Abstract for JACET Travel Grant
Kuei-Ju Tsai
(Sponsored by Eiken Foundation of Japan)

My research stemmed from my EFL teaching context, viz. a regional university in Southern Taiwan, where most students' auditory-oral skills lag far behind their literacy skills (reading and writing). The reason for the huge gap can be attributed to the washback effect from national college entrance examination, where only reading and writing are tested. To compound the problem, EFL learners have little exposure to the target language outside the classroom. All the factors combined to give impetus for me to embark on this research journey.

This study investigated the effects of listening to audiobooks with tablet computers on EFL learners' listening fluency. In the study authentic materials (audiobooks instead of commercial textbooks geared towards listening skills training) were used in order to see whether teacher-guided extensive listening has an impact on developing listening fluency. Findings suggest that regular contact with audiobooks facilitates EFL learners' listening fluency on familiar materials, and such progresses can also be carried over to their general listening proficiency. Also, listening and simultaneous reading accompanying texts is more beneficial than listening only, regardless of whether the texts are highlighted in real-time. These findings have implications for teachers to invest efforts in developing EFL learners' listening proficiency and to explore the possibilities of a wider range of authentic materials.

I would like to take this opportunity to express my gratitude for JACET and the financial support from Eiken Foundation of Japan. I do not believe that I will adequately be able to put into words how much receiving this grant means to me. Thanks to your support, I was able to share my action research with fellow college English teachers in Japan and obtain their insightful input and valuable experiences, which in turn is a great opportunity for me to advance my research.

Huei-Chun Teng
(Sponsored by Council on International Educational Exchange)

Huei-Chun Teng is currently a professor of Applied Foreign Languages in National Taiwan University of Science and Technology. Her research interests include EFL listening research, communication study, and language assessment. The presentation given by Professor Teng in the 58th JACET International Convention focused on exploring teaching beliefs for EFL listening instruction. The participants were 36 EFL teachers in junior high schools in Taiwan. The instruments included the questionnaire of teachers' beliefs, the classroom observation, and the semi-structured interview. The teaching belief most often held by the EFL teachers is 'building up students' confidence in their own listening ability'. The important teaching activities are to make listening work enjoyable and create pre-listening activities. By providing empirical descriptions of EFL teacher beliefs on listening instruction, this study is expected to offer

specific insights for listening instruction and thus generate more effective suggestions for L2 listening pedagogy, and ultimately to teach EFL learners to become more effective listeners. Thanks to the JACET travel grant, Prof. Teng had the chance of sharing her research findings with the JACET participants as well as attending the JACET opening ceremony. In the future, it is hoped that there will be more academic interaction between the college English teachers in Japan and in Taiwan.

Appreciation for the Travel Grant to participate in the 58th JACET International Convention (Nagoya, 2019)
Anita Lie
(Sponsored by The Institute for International Business Communication)

My presentation "The Impact of an In-Service Certification Program on the Use of English and Classroom Practices" reported on our study of 90 teachers in our certification program. This study aims at investigating the impact of the certification program on the English teachers' classroom practices and professional development. Specifically, this study intends to answer to what extent teachers attempt to enhance their English Proficiency and report changed behaviors in their classrooms. We conducted a survey of these English teachers and administered an assessment of their English proficiency. Then we selected these teachers based on their professional stages and interviewed them. This study found that teachers' participation in the certification program brought about different levels of changes in their use of English and classroom practices.

This research is part of a three-year study of secondary school teachers of English in five provinces funded by a multi-year research grant from the Directorate of Research and Community Service, the Indonesian Ministry of Research, Technology, and Higher Education. Currently, we are completing the second year and plan to focus on teachers' capacities to play the critical roles of curriculum developers and makers in the next year.

My research interests include teacher professional development, language policy, and heritage language learning. The 58th JACET International Convention was very enlightening. The presentations were of high quality and the sessions were very well organized. As a participant, I felt very well-informed about the program as well as the technical details including the venue location, transportation, and lunch (I really enjoyed lunch at the campus cafeteria—affordable and delicious). In addition, I also enjoyed interacting with other presenters in the convention. If given the chance, I would love to participate again in the next JACET Convention and will recommend it to my colleagues. THANK YOU VERY MUCH! It was definitely a great honor for me to receive the Travel Grant.

JAAL-in-JACET 企画
第１回　授業学研究大会
(JACET SIG 授業学研究会
（関東・中部・関西）主催)
を振り返って
授業学研究会　代表
馬場　千秋（関東支部）
佐藤　雄大（中部支部）
村上　裕美（関西支部）

2019 年 5 月 25 日（土）に東洋大学白山キャンパスにて、JAAL-in-JACET 企画第 1 回授業学研究大会が開催されました。参加者は 30 名でした。

2005 年に発足した授業学研究委員会、2010 年から 2 年間の第 2 次授業学研究委員会を経て、英語授業学研究は、関東・中部・関西の 3 支部で SIG 研究会の中で研究されてきました。2016 年度から 2018 年度の 3 年間、「授業学」をテーマに英語教育セミナーが行われ、改めて授業について考えてまいりました。セミナーの 3 年間で終わるのではなく、3 支部にある SIG 授業学研究会合同で「英語授業学」を考える機会を年 1 回作っていきたいとの思いから、2019 年度より、授業学研究大会を開催することといたしました。

基調講演は岡田伸夫先生（関西外国語大学）に「授業学研究の一実践例：場面・文脈を利用した文法指導」というタイトルでお話しいただきました。前半では、英語授業学とは何かを考えていくために、JACET での英語授業学研究の誕生の背景と発展の契機、そしてその後の JACET での英語授業学への取り組みについて、後半は岡田先生ご自身の授業実践についての具体例をご紹介いただきました。

研究発表が 7 件、実践報告が 4 件で、参加者との活発な意見交換が行われました。

シンポジウムは、「これからの英語授業学」というタイトルで、各支部の代表として、佐藤（中部・名古屋外国語大学）、村上（関西・関西外国語大学短期大学部）、そして馬場（関東・帝京科学大学）が登壇しました。2018 年度の英語教育セミナーでも同じ顔触れでシンポジウムを行い、今後、どのように英語授業学研究を考えていけばよいか検討しました。その中で、「英語授業学の理論構築の必要性」が問題提起されました。今回のシンポジウムでは、各支部が研究会の中で行っている理論構築とその理論を活かした実践について紹介すると同時に、参加者の方々と議論を深めることができました。

本研究大会を開催するにあたり、素晴らしい会場を提供してくださった東洋大学の関係者の皆様、そして、当日、スタッフとして運営を支えてくださった授業学研究会の皆様に改めて御礼申し上げます。

3 支部としての活動は、今回の授業学研究大会のみならず、3 支部合同で Web ジャーナルを発行する予定です。第 1 回授業学研究大会で発表された内容を中心に、2020 年 3 月発行予定で、現在、進めております。

2020 年度は 5 月中旬に東京で開催する予定です。日頃の英語授業について考え、意見交換をしていく素晴らしい機会です。皆様のご参加をお待ちしております。

本部だより

代表幹事　下山幸成（東洋学園大学）

平素より JACET の活動にご理解とご協力を賜りまして誠にありがとうございます。今年度の国際大会も多くの会員の皆さまにご参加いただき、ありがとうございました。また、本部及び中部支部の国際大会組織委員会の皆さまのご尽力にも心よりお礼申し上げます。

さて、本部からは 6 月 16 日に行われました定時社

員総会議事録、8 月 29 日に行われました会員総会議事録、平成 30（2018）年度の事業状況報告書・収支計算書・財産目録・監事監査報告書をお知らせいたします。

一般社団法人大学英語教育学会
2019 年度定時社員総会議事録

日　時：2019 年 6 月 16 日（日）
　　13 時 30 分～14 時 45 分
会議場：公益財団法人日本英語検定協会大会議室 B
　　（東京都新宿区横寺町 55）
総社員数：　81 名
出席社員数：71 名
内訳　本人出席　28 名（出席者名簿別添）
委任状出席　　43 名（委任状出席者名簿別添）
よって『定款』第 18 条および第 20 条の規定の定足数以上を充足
（＊第 18 条および第 20 条による過半数は 41 名）
陪席者：5 名（陪席者名簿別添）
議　長：下山幸成
議事録署名人：尾関直子、田地野彰
議事録作成者：馬場千秋

Ⅰ．開会
河野円総務担当理事より、定款所定の定足数を満たした旨の報告があり、社員総会の開会が宣言された。

Ⅱ．会長挨拶
寺内一会長より、任期満了に伴う役員の選出等、いろいろな案件があるので慎重に審議をお願いしたいとの挨拶があった。

Ⅲ．議長選出
河野円総務担当理事が議長の選出について諮ったところ、議長に下山幸成氏が選出された。

Ⅳ．議事録署名人選出
議長が議案審議に先立ち、議長の他の議事録署名人 2 名について、尾関直子氏と田地野彰氏の両名を指名したい旨を述べたところ、異議なく可決された。

Ⅴ．審議案件
第 1 号議案　会員異動状況報告の件
河野円総務担当理事より、平成 30（2018）年度会員異動状況について報告があり、可決された。

第 2 号議案　平成 30（2018）年度事業報告・収支決算の件
1. 平成 30（2018）年度事業報告
河野円総務担当理事より、平成 30（2018）年度事業報告の説明があり、下記 1～6 号事業がすべて可決された。
⑴ 1 号事業　大学英語教育及び言語教育関連の研究理論の発表及びその実践結果の報告のための大会、セミナー等の開催
⑵ 2 号事業　紀要、学会誌等の出版物の刊行
⑶ 3 号事業　大学英語教育に係る国内外の研究者・学術団体・諸機関の実践活動に対する表彰
⑷ 4 号事業　大学英語教育に係る国内外の研究者・学術団体・諸機関との協力
⑸ 5 号事業　大学英語教育及び言語教育関連の理論及びその実践方法に関する調査・研究
⑹ 6 号事業　その他のこの法人の目的を達成するために必要な事業

2. 平成 30（2018）年度決算
淺川和也財務担当理事より、平成 30（2018）年度の決算報告があり、可決された。

3. 監事監査報告
笹島茂監事より、平成 30（2018）年度の事業監査

および会計監査に関して、適正であった旨報告があり、可決された。

第3号議案　役員選任の件

議長が、任期満了役員の選出方法について諮ったところ、寺内一会長に役員候補者案の推薦を求める旨の発言があり、全員が異議なくこれに賛成した。

議長が寺内一会長に役員候補者を推薦するよう求めたところ、寺内一会長より理事20名、監事2名の候補者を、下記のとおり提案があり、これを各々諮ったところ、満場一致をもって可決選任された。

理事　相川　真佐夫　（就任）
理事　淺川　和也　（重任）
理事　藤尾　美佐　（就任）
理事　石井　和仁　（重任）
理事　石川　有香　（就任）
理事　岩井　千秋　（重任）
理事　河野　円　（重任）
理事　木村　松雄　（重任）
理事　内藤　永　（重任）
理事　小田　眞幸　（重任）
理事　尾関　直子　（重任）
理事　佐藤　雄大　（重任）
理事　下山　幸成　（就任）
理事　田地野　彰　（重任）
理事　寺内　一　（重任）
理事　冨田　かおる　（重任）
理事　上田　倫史　（重任）
理事　植松　茂男　（就任）
理事　上野　之江　（就任）
理事　渡辺　敦子　（就任）
計　20名

監事　駒田　誠　（重任）
監事　笹島　茂　（重任）
計　2名

また、議長が、選任された理事20名と監事2名に、役員就任について就任承諾の有無を尋ねたところ、その場に出席していた藤尾美佐氏、石井和仁氏、石川有香氏、岩井千秋氏、河野円氏、木村松雄氏、内藤永氏、尾関直子氏、佐藤雄大氏、下山幸成氏、田地野彰氏、寺内一氏、冨田かおる氏、上田倫史氏、植松茂男氏、上野之江氏、渡辺敦子（本名　鈴木敦子）氏、および、陪席していた相川真佐夫氏、淺川和也氏、小田眞幸氏は理事就任を承諾し、出席していた笹島茂氏、および、陪席していた駒田誠氏は、監事就任を各々承諾した。

これをもって選任された役員が全員、就任を承諾したことを確認した。

なお、これらの役員の任期は、2021年6月の定時社員総会までであることが確認された。

本社員総会で任期満了退任の役員は、石川慎一郎理事、村田泰美理事、尾田智彦理事、小栗裕子理事、志水俊広理事、高橋潔理事および高橋俊章理事である。

Ⅵ. 報告

1. 2019年度事業計画および収支予算

河野円総務担当理事より、2019 年度の事業計画および人事について説明があった。また、淺川和也財務担当理事より、事業計画に基づいた収支予算について説明があった。

2. 現行規程等報告

河野円総務担当理事より、平成30（2018）年度中に改正が行われた規程、ガイドライン等について報告があった。

Ⅶ. 閉会

以上をもって一般社団法人大学英語教育学会定時社員総会の議事を終了したので、議長は閉会を宣した。

以上

2019年度　一般社団法人大学英語教育学会
会員総会議事録

日　時：2019年8月29日（木）
　　13：30 ～ 14：00
場　所：名古屋工業大学51号館5111教室
司　会：馬場千秋（副代表幹事）
書　記：馬場千秋（副代表幹事）
出席会員数：約60名

Ⅰ．開会
司会の馬場千秋副代表幹事より、会員総会の開会が宣言された。

Ⅱ．会長挨拶
寺内一会長より、活動報告等をさせていただく旨の挨拶があった。

Ⅲ．報告事項
1. 総務関係
下山幸成総務担当理事より、資料に基づき、2019年度会員状況報告（1頁）（以下、「総会資料」の頁数）、2018年度活動報告（1頁）、2019年度活動計画（1頁）、『定款』および『会員規程』改正の件（1頁）に関する説明があった。
また、2019年3月31日（2018年度末）に、「感謝状贈呈ガイドライン」により、JACETに貢献された以下の方に感謝状が送付されたとの報告があった。
（敬称略）
岡田伸夫
2002年4月1日～2005年9月30日（理事）
2008年4月1日～2012年3月31日（理事）
2002年4月1日～2006年3月31日
（関西支部長）
倉橋洋子
2002年4月1日～2005年9月30日（理事）
2006年4月1日～2008年3月31日（理事）
2004年4月1日～2006年3月31日
（中部支部長）
計2名

2. 財務関係
淺川和也財務担当理事より、資料に基づき、2018年度決算報告（3頁）、2019年度予算（3頁）に関する報告があった。

3. 2019年度人事
下山幸成総務担当理事より、資料に基づき、2019年度人事（4頁）に関する説明があった。

4. 各委員会からのご案内
・国際大会組織委員会
佐藤雄大国際大会担当理事より、現在開催されている2019年度国際大会の報告があった。また、2020年度は9月8日（火）～10日（木）に同志社大学新町キャンパスで、2021 年度は安田女子大学で開催することが報告された。

・『JACET通信』委員会
寺内一会長より、JACET通信第206号を12月に紙媒体で発行することが報告された。

・学術出版委員会
尾関直子学術出版委員会紀要担当理事より、紀要第64 号の進捗状況について報告があった。また、Selected papers第6号の発行と第7号の投稿について報告があった。

・セミナー事業委員会

淺川和也セミナー事業委員会担当理事より、2019年度第2回ジョイントセミナー（2018年8月20日（火）～22日（木）於：玉川大学）の報告があった。また、2020年度第3回ジョイントセミナーは2021年3月に京都大学で実施する予定であることが報告された。

・研究促進委員会

内藤永研究促進委員会担当理事より、JAAL-in-JACET学術交流集会を2019年11月30日に高千穂大学にて開催する予定であることが報告された。

・学術交流委員会

小田眞幸学術交流委員会担当理事より、現在開催中の2019年度国際大会でのJAAL-in-JACETシンポジウム開催およびAILAへの会員登録方法に関するJAAL-in-JACETの対応について報告があった。

・大学英語教育学会賞運営委員会

木村松雄大学英語教育学会賞運営委員会担当理事より、今年度の授賞式が2019年8月27日（火）開会式後に、新人発表部門の授賞式が2019年8月30日（木）15時より開催されることが報告された。

Ⅳ. 閉会

以上をもって、一般社団法人大学英語教育学会会員総会の議事を終了したので、司会は閉会を宣言した。以上

一般社団法人大学英語教育学会
平成30（2018）年度事業状況報告書

定款第5条第1項の（1）から（6）に掲げる平成30年度の事業計画実施概要の報告は下記の通りです。

記

1号事業報告：大会セミナー等事業

(1) JACET第57回国際大会（仙台、2018）の開催

平成30年8月28日から30日まで東北学院大学土樋キャンパス（宮城県仙台市）において、「グローバル化に向けた初等英語教育から高等英語教育までの学習成果の質保証」をテーマにJACET第57回国際大会（仙台、2018）を開催した。742人の参加者があった。本大会は、基調講演3件、海外提携学会代表による招待講演13件、特別企画シンポジウム2件をはじめ、東北支部企画として特別講演1件と支部企画シンポジウム1件、State of the Artシリーズとして特別企画ワークショップ2件、特別委員会報告1件、賛助会員シンポジウム5件、研究会ポスターセッション23件、Doctoral Thesisポスターセッション3件、グローバルポスターセッション4件、外部試験テストポスターセッション13件と、多岐に渡る内容で行われた。また、一般発表としては、研究発表78件（内、学生枠4件）、実践報告39件、ワークショップ7件、ポスターセッション7件、後援協賛企画2件が行われた。

本大会の全体報告および基調講演、招待講演、全体シンポジウム、支部企画、特別企画ワークショップ、賛助会員特別シンポジウム、特別委員会報告は、12月に刊行した『JACET通信203号』に掲載し、学会ウェブサイトで会員に周知した。また、後援名義許可をいただいた文部科学省、仙台市教育委員会、仙台国際観光協会、東北大学への報告も行った。

(2) JACET第1回ジョイントセミナー（京都、2018）の開催

平成30年8月20日から22日に京都府立大学稲盛記念会館において、第45回サマーセミナーと第6回英語教育セミナーを併せたJACET第1回ジョイントセミナー（京都、2018）を開催した。“Classroom research revisited: Who are the practitioners?”（「授業学」を問い直すーだれが‘practitioners’か？）の

テーマのもと、英国リーズ大学のJudith Hanks先生、京都大学の Tim Stewart 先生、関西大学の竹内理先生、広島大学の柳瀬陽介先生、兵庫教育大学の吉田達弘先生を講師として招き、講演やシンポジウムが行われた。また、「授業学」をテーマとして行ってきた（英語教育セミナーにあたる3年間）活動の総括として、JACET授業学研究会（関東、中部、関西）による合同シンポジウムが行われた。岡田伸夫先生の司会のもと、馬場千秋先生（関東）、佐藤雄大先生（中部）、村上裕美先生（関西）がパネリストとして登壇され、議論を交わした。さらに、JACETアーカイブほか参加者によるポスターセッション（12件）、賛助会員によるプレゼンテーション（10件）や展示もなされた。参加者は 140 人で、活発な意見交換や情報交換が行われ、3日間の研修で当該テーマについての理解を深めた。実施内容については『JACET通信』203号で報告した。今後、2016年から2018年になされた英語教育セミナーでの成果をまとめ、『英語授業学研究の最前線（仮）』（ひつじ書房）として刊行すべく、編集をすすめている。

(3) 支部大会の開催

以下のように、各支部において支部大会が開催された。披露された研究成果や知見が各研究者の研究活動に大きな道標となった。大会内容については、各支部ニューズレターで報告された。

・北海道支部大会　平成30年7月7日
・関東支部大会　平成30年7月8日
・中部支部大会　平成30年6月16日
・関西支部大会　平成30年11月17日
・中国・四国支部大会　平成30年6月2日、10月27日
・九州・沖縄支部大会　平成30年7月7日

(5) 支部講演会の開催

以下のように、各支部において講演会が開催された。披露された研究成果や知見が各研究者の研究活動の大きな道標となった。

・関東支部講演会
平成30年4月14日、9月8日、11月10日、12月8日、平成31年1月12日
・関西支部講演会
平成30年8月19日、10月13日、平成31年3月9日
・九州・沖縄支部講演会
平成30年7月7日、11月24日

(6) 支部研究会等の開催

以下のように、各支部において研究会等が開催された。披露された研究成果や知見が各研究者の研究活動の大きな道標となった。

・北海道支部研究会
平成30年11月18日、平成31年3月3日
・東北支部例会
平成30年11月25日
・関東支部月例研究会
平成30年5月12日、6月9日、10月13日
・中部支部研究会
平成30年11月17日、平成31年3月2日
・中国・四国支部地区大学間連携イベント Oral Presentation & Performance (OPP) 研究会
平成30年12月16日
・九州・沖縄支部特別研究会
平成30年10月13日

2号事業報告：出版物刊行事業

(1)『紀要』の刊行

平成31年2月25日に『JACET Journal』63号を刊行した。会員より応募された論文、リサーチ・ノート、及びブックレビューの3つの分野における論文を厳正に審査し、掲載、非掲載を決定した。会員及び英語教育関係機関（国立国会図書館、大学基準協会、コ

ンピュータ利用協議会、全国語学教育協会、海外提携学会等）へ送付し、日本の英語教育研究の最新情報を発信した。

⑵『Selected Papers』の発行

平成 30 年 8 月に『JACET International Convention Selected Papers』5 号を発行した。国際大会で口頭発表（一般ポスター発表も含む）した発表者の学術研究を奨励し、論文発表の機会を与えるため、また海外の学会や英語教育関係者に日本の研究をリアルタイムで発信するため、電子ジャーナル（オンライン）として発行した。

⑶『JACET 通信』の刊行

① 平成 30 年 7 月 1 日に『JACET 通信』202 号（日本語、ウェブ版）
② 平成 30 年 12 月 1 日に『JACET 通信』203 号（日本語、印刷版）
③ 平成 31 年 3 月 1 日に『JACET 通信』204 号（英語、ウェブ版）

通信を 3 回刊行し、大学英語教育関連の情報発信に寄与した。学会の最近の動向や優秀な大学英語教育を紹介することにより、会員の大学英語教員としての意識を向上させることができた。また、国内の他学会からの寄稿により、学際的な教育や研究の動向を知ることもできた。②では第 57 回国際大会報告を行うとともに、巻頭言では会長から「第 1 回 JAAL-in-JACET 学術交流集会」を中心とした 2018 年度からの新しい事業についての説明も掲載した。

⑷ 支部紀要の発行

各支部で紀要を発行し、会員及び英語教育関係者等へ送付した。支部紀要は、支部会員の学術研究を奨励し、論文発表の機会を与えた。また、日本の英語教育研究の最新情報を発信した。

・『北海道支部紀要』15 号　平成 31 年 3 月 15 日
・『関東支部紀要』6 号　平成 31 年 3 月 31 日
・『中部支部紀要』16 号　平成 30 年 12 月 20 日
・『JACET Kansai Journal』21 号　平成 31 年 3 月 31 日
・『大学英語教育学会中国・四国支部紀要』16 号　平成 31 年 3 月 31 日
・『Annual Review of English Learning and Teaching』23 号　平成 30 年 11 月 30 日

⑸ 支部ニューズレターの発行

各支部でニューズレターを発行し、支部活動動向や、支部会員への英語教育に関する情報提供と情報交換を行った。

・『JACET 北海道支部ニューズレター』32 号
　平成 31 年 3 月 20 日
・『JACET 東北支部通信』45 号
　平成 31 年 3 月 31 日
・『JACET 関東支部ニューズレター』11, 12 号
　平成 30 年 9 月 30 日、平成 31 年 3 月 31 日
・『JACET Chubu Newsletter』40, 41 号
　平成 30 年 5 月 10 日、平成 31 年 1 月 10 日
・『JACET Kansai Newsletter』80, 81, 82 号
　平成 30 年 5 月 20 日、7 月 31 日、11 月 1 日
・『大学英語教育学会中国・四国支部ニューズレター』21, 22 号
　平成 30 年 7 月 30 日、平成 31 年 1 月 20 日
・『九州・沖縄支部ニューズレター』34 号
　平成 30 年 4 月 2 日

3 号事業報告：表彰事業

⑴ 大学英語教育学会賞の表彰

第 57 回（2018 年度）国際大会の 2 日目（平成 30 年 8 月 29 日）に、英語教育における研究または実践上の顕著な業績を通してわが国における大学英語教育の改善と進歩・発展に寄与した本学会員である個人または団体に対して表彰を行なった。受賞者に対して

は賞状とともに記念品を贈呈した。
平成30（2018）年度大学英語教育学会賞
論文部門：
受 賞 者：松田紀子（藍野大学）
対象業績：論文“Evidence of the effects of text-to-speech synthetic speech to improve second language learning”（JACET Journal No.61 (2017), pp. 149-164）
新人発表部門：
受 賞 者：Wang, Wei Tung（明治大学大学院生）
対象業績：研究発表“Vocabulary Acquisition from Elementary School to Senior High School in Japan and Taiwan”（大学英語教育学会（JACET）第57回国際大会（仙台、2018）2018年8月28日発表）
その他の部門に関して、今年度は該当者がなかった。

4号事業報告：協力事業
(1) 関係学術団体への派遣Ⅰ（海外提携学会）
① MELTA (Malaysian English Language Teaching Association)
平成30年8月18日から20日にThe 27th MELTA International Conferenceがマレーシアのジョホールバルで開催された。本学会より学会代表者1名を派遣し、研究発表のほか、連携学会関係者との意見交換を行った。
② KATE（The Korea Association of Teachers of English）
平成30年7月6日と7日に大韓民国で開催されたKATE 2018 International Conferenceに本学会より学会代表者1名を派遣し、研究発表のほか、提携学会関係者との意見交換を行った。
③ AILA（Association Internationale de Linguistique Appliquée）EBIC
平成30年6月4日にオランダで開催されたAILA（国際応用言語学会）のEBIC (Executive Board and International Committee) business meeting に、AILA担当でAILA EBICメンバーでもある委員を派遣した。平成29年度のAILAの資金（会費+寄附金）の運用、平成29年のHonorary Member、UNESCOに言語政策に関する提言をする委員会（Strategic Collaboration）、社会政策委員会（Socially Relevant Politics）の新規開設、AILAの地域活動を活発化するSAAL と MAAL との共同企画、AILA の Website Development Team の新設、Oasis、Multilingual Matters, Word of the Yearとの協力、AILA2017年Rio de Janeiro大会の報告および2020年Groningen大会の準備状況報告、その他の報告・協議が行われた。
④ PKETA（Pan-Korea English Teachers Association）
平成30年11月3日に大韓民国で開催された2018 PKETA International Conferenceに本学会代表者1名を派遣し、研究発表のほか、提携学会関係者との意見交換を行った。
⑤ ALAK（The Applied Linguistics Association of Korea）
平成30年10月13日に大韓民国で開催されたALAK 2018 International Conferenceに本学会代表者1名を派遣し、研究発表のほか、提携学会関係者との意見交換を行った。
⑥ CELEA（Chinese English Language Education Association）
平成30年度の派遣はなし。
⑦ ETA-ROC（English Teachers' Association of Republic of China）
平成30年11月9日から11日に台湾で開催されたThe 27th International Symposium and Book Fair on English Teachingに本学会より学会代表者1名を派遣し、研究発表のほか、提携学会関係者との意見交換を行った。
⑧ Thai TESOL（Thailand TESOL）
平成31年1月18日と19日にタイ王国で開催された The 39th Annual ThaiTESOL International

Conference に本学会代表者 1 名を派遣し、研究発表のほか、提携学会関係者との意見交換を行った。

⑨ RELC（Regional Language Centre）

平成 31 年 3 月 11 日から 13 日にシンガポール共和国で開催された 54th RELC International Conference and 5th Asia-Pacific LSP & Professional Communication Conference に本学会代表者 1 名を派遣し、研究発表のほか、提携学会関係者との意見交換を行った。

(2) 関係学術団体への派遣Ⅱ（国内提携学会）

① JALT（The Japan Association for Language Teaching）

平成 30 年 11 月 23 日から 26 日に静岡県で開催された 44th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition に本学会代表者 1 名を派遣し、研究発表のほか、提携学会関係者との意見交換を行った。

(3) 提携学会からの代表者受け入れ

① JACET 国際大会での Reception 開催

平成 30 年 8 月 27 日に開催された第 57 回（2018 年度）国際大会学術交流レセプションに提携学会からの代表者を招待し、親睦を深めるとともに情報交換を行った。

② JACET 国際大会での提携学会学術交流会議開催

平成 30 年 8 月 28 日に提携学会学術交流会議を行い、提携文書内容の再検討、共同研究活動の審議などを行い、各提携団体とのさらなる研究交流の可能性が拡がった。

③ JACET 国際大会での招聘発表、シンポジウムの実施

平成 30 年 8 月 28 日から 30 日に開催された第 57 回（2018 年度）国際大会に、国外・国内提携学会からの代表者を招聘し、学術交流、協力活動に関する事業を計画し、招待講演、AILA-East シンポジウムを通して各提携団体とのさらなる研究交流の可能性が拡がった。

5 号事業報告：調査研究事業

(1) 専門分野別の研究会活動

48 の研究会がそれぞれの分野での調査研究を基盤として、会員の資質向上、書籍出版、教材開発、紀要等での論文発表などの活動を行った。それにより、大学英語教育の発展に寄与し、会員相互の専門知識と技能の向上、会員の知見による学術の発展及び社会への還元を行った。また、各研究会の研究成果物を可能な限り公開できるように、そのための整理を行った。

(2) JAAL-in-JACET 学術交流集会の開催

平成 30 年 12 月 1 日に高千穂大学で第 1 回 JAAL-in-JACET 学術交流集会を開催した。「研究者間、研究会間、産学連携、学会連携など横のつながりを創り出すような学術交流集会」を目標として、研究発表 15 件、産学連携発表 3 件、研究会のポスター発表 18 件、賛助会員展示 16 件、賛助会員プレゼン 12 件、そして、情報交換会分科会と全体会、会長講演を実施した。約 170 名が参加した。本学術交流集会の公式ホームページ（https://jaal.site/2018/）を設置して情報を発信すると共に、情報交換会の報告書『第 1 回 JAAL-in-JACET 学術交流集会 情報交換会まとめ』、『JACET 通信』、論文集『JAAL-in-JACET Proceedings, Volume 1』（査読付き）を通じて、その成果を公表した。

6 号事業報告：その他　法人事業

(1) 理事会の開催

平成 30 年 5 月 20 日、6 月 17 日、8 月 27 日、12 月 23 日、平成 31 年 3 月 17 日の計 5 回、理事会を行った。

⑵ 定例社員総会の開催

平成30年6月17日に平成30年度定例社員総会を行い、平成29年度決算、平成30年度人事、諸規程の承認等を行った。内容はウェブサイトおよび『JACET通信』で報告した。

⑶ その他の委員会の開催

定例の各運営委員会、運営会議、顧問会議、支部委員会、支部役員会を適宜行った。

⑷『会員名簿』の刊行

会員情報の提供、定款等規則の開示を目的として『一般社団法人大学英語教育学会（JACET）会員名簿』を平成30年12月1日に発行した。

⑸ 社員選挙の実施

平成30年10月から平成31年1月にかけて、2019～2020 年度大学英語教育学会社員の選挙を行った。『社員選挙規程』に則り立候補および他薦を応募し、候補者を選出し、候補者公示の後に異議申し立て期間を設置し、社員を選出した。

⑹ JACET アーカイブの作成

平成30年4月から8月にかけてJACETアーカイブを作成し、平成 30 年度国際大会で「JACET アーカイブ」をお披露目した。

⑺ 支部総会の開催

各支部において、支部総会を開催した。

・北海道支部総会　平成30年7月7日
・東北支部総会　平成30年6月30日
・関東支部総会　平成30年7月8日、11月10日
・中部支部総会　平成30年6月16日、11月17日
・関西支部総会　平成30年11月17日
・中国・四国支部総会　平成30年6月2日
・九州・沖縄支部総会　平成30年10月13日

以上

平成 30（2018）年度収支計算書

法　人　名：一般社団法人　大学英語教育学会

収支計算書

平成 30年　4月　1日 から平成 31年　3月 31日 まで

（単位：円）

科　　目	予　算　額	決　算　額	差　　額
Ⅰ　事業活動収支の部			
1.　事業活動収入			
①基本財産運用収入			
基本財産利息収入	8,000	7,114	886
②入会金収入			
入会金収入	220,000	178,000	42,000
③会費収入			
一般会員会費収入	20,115,000	19,638,000	477,000
学生会員会費収入	510,000	455,000	55,000
維持会員会費収入	169,000	143,000	26,000
賛助会員会費収入	1,980,000	1,984,000	△ 4,000
団体会員会費収入	560,000	560,000	0
会費収入計	23,334,000	22,780,000	554,000
④事業収入			
展示・広告収入	2,743,500	2,802,000	△ 58,500
参加費収入	7,601,500	7,172,300	429,200
書籍販売収入	1,875,000	1,245,304	629,696
雑収入	1,880,000	1,877,000	3,000
事業収入計	14,100,000	13,096,604	1,003,396
⑤寄付金収入			
寄付金収入	1,000,000	500,000	500,000
⑥雑収入			
受取利息収入	1,000	61	939
広告収入	250,000	100,000	150,000
雑収入計	251,000	100,061	150,939
事業活動収入計	38,913,000	36,661,779	2,251,221
2.　事業活動支出			
①事業費支出			
印刷製本支出	4,626,000	4,184,947	441,053
給料手当支出	3,955,214	3,925,181	30,033
臨時雇賃金支出	1,431,360	1,182,602	248,758
賞与支出	674,867	674,867	0
旅費交通費支出	4,216,479	4,259,679	△ 43,200
通信運搬費支出	1,486,800	1,676,108	△ 189,308
消耗什器備品費支出	1,202,026	668,400	533,626
会議費支出	2,512,400	3,085,795	△ 573,395
保険料支出	0	31,400	△ 31,400
謝金支出	964,685	736,151	228,534
負担金支出	180,000	168,615	11,385
図書研究費支出	1,015,000	840,180	174,820
事業費支出計	22,264,831	21,433,925	830,906
②管理費支出			
給料手当支出	2,270,542	2,273,542	△ 3,000
賞与支出	441,600	441,600	0
臨時雇賃金	10,000	6,240	3,760
法定福利費支出	1,050,000	1,007,243	42,757
会議費支出	294,540	230,470	64,070
旅費交通費支出	3,076,260	2,543,037	533,223
通信運搬費支出	1,701,060	2,060,252	△ 359,192
消耗什器備品費支出	590,300	642,004	△ 51,704
修繕費支出	2,000	0	2,000
印刷製本費支出	943,380	871,870	71,510
支払手数料支出	1,186,000	1,130,800	55,200
光熱水料費支出	140,000	141,336	△ 1,336
賃借料支出	2,495,560	2,490,048	5,512
謝金支出	70,000	42,670	27,330
租税公課支出	1,000	0	1,000
負担金支出	60,000	60,000	0
図書研究費支出	5,000	0	5,000
雑支出	167,900	112,364	55,536
管理費支出計	14,505,142	14,053,476	451,666
③その他の支出			
法人税、住民税及び事業税	70,000	70,000	0
事業活動支出計	36,839,973	35,557,401	1,282,572
事業活動収支差額	2,073,027	1,104,378	968,649
Ⅱ　投資活動収支の部			
1.　投資活動収入			
投資活動収入計	0	0	0
2.　投資活動支出			
①その他の支出			
退職積立金支出	144,000	0	144,000
投資活動支出計	144,000	0	144,000
投資活動収支差額	△ 144,000	0	△ 144,000
Ⅲ　財務活動収支の部			
1.　財務活動収入			
財務活動収入計	0	0	0
2.　財務活動支出			
財務活動支出計	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0
Ⅳ　予備費支出	0	－	0
	0		
当期収支差額	1,929,027	1,104,378	824,649
前期繰越収支差額	0	3,545,038	△ 3,545,038
次期繰越収支差額	1,929,027	4,649,416	△ 2,720,389

法　人　名：一般社団法人　大学英語教育学会

財　産　目　録

平成 31年　3月 31日 現在

（単位：円）

貸　借　対　照　表　科　目		場所・物量等	使用目的等	金　　額
（流動資産）				
	現金			68,372
	普通預金			5,129,382
	定期預金			505,046
	未収金			40,300
	たな卸資産			1,141,710
流動資産合計				6,884,810
（固定資産）				
基本財産				
	定期預金			20,000,000
その他固定資産				
	什器備品			1
	敷金			963,900
固定資産合計				20,963,901
資産合計				27,848,711
（流動負債）				
	未払費用			334,070
	未払法人税等			70,000
	前受金			550,000
	預り金			139,614
流動負債合計				1,093,684
固定負債合計				0
負債合計				1,093,684
正味財産				26,755,027

平成30（2018）年度監事監査報告書

監事監査報告書

一般社団法人　大学英語教育学会

会長(代表理事)　寺内　一　殿

私ども監事は、一般社団法人大学英語教育学会の平成３０年４月１日から平成３１年３月３１日までの業務について監査を実施しました。その結果について、次のとおり報告いたします。

１．監査の概要

各監事は理事会に出席するほか、理事および法人の関係者から事業の執行状況について聴取し、業務について監査を実施しました。

また、当該事業年度に係る貸借対照表ならび正味財産増減計算書、およびその附属明細書について監査を実施しました。

２．監査の結果

（１）業務監査の結果

法人の業務について、法令、定款および規則等に従い、適正に運営されているものと認めます。

（２）会計監査の結果

貸借対照表ならび正味財産増減計算書、およびその附属明細書は、法人の財産および損益の状況を正しく示しているものと認めます。

令和１年５月１３日

一般社団法人　大学英語教育学会

監　事　笹島茂

監　事　別府貴

支 部 だ よ り

＜九州・沖縄支部＞

(1) 支部研究大会

①第 31 回支部研究大会

日時：2019 年 7 月 13 日（土）9:10～17:40

場所：東海大学熊本キャンパス

大会テーマ：内容を重視した英語教育　Content Based Instruction in L2 Learning

基調講演：

「内容重視の英語教育の理想と現実 ―ESP・CLIL・EMI・ CBI の整理と統合の可能性」寺内一（高千穂大）

(2) 研究会

①第 198 回東アジア英語教育研究会

日時：2019 年 6 月 15 日（土）15:30～17:35

場所：西南学院大学

研究発表：

1)「小学校英語教員（JET）養成と小学校教材内容と使用語彙の分析」 木下正義（元福岡国際大）、柏木哲也（北九州市立大）

2)「日本とフィンランドの小学校英語教科書に出てくる語彙比較」柏木哲也（北九州市立大）

3) “Serious ENGLISH with Lego Bricks: Facilitating Communicative Competence in English Education” Hisako Ohtsubo (Showa Women's University)

②第 199 回東アジア英語教育研究会

日時：2019 年 7 月 27 日（土）15:30～17:35

場所：西南学院大学

研究発表：

1)「小学校英語の実践のための語彙の選定」 石田麻衣子（神戸大院生）、石川慎一郎（神戸大）

2)「CLIL 的アプローチから考えられる可能性と課題について」　東宮史（東亜大）

③第 200 回東アジア英語教育研究会（第 200 回記念大会）

日時：2019 年 9 月 14 日（土）14:00～17:35

会場：西南学院大学

特別講演

「東アジア英語教育研究会の過去、現在及び将来」木下正義（元福岡国際大）

シンポジウム

“Current Situation in ELES in Japan, Korea, and Taiwan: Teacher Training and Future Prospects” 樋口晶彦(宮崎国際大)、Mae-Ran Park（Pukyong National University, Republic of Korea）、Jenny Chen (National Taipei University of Education, Taiwan)、川上典子（鹿児島純心女子大）

④第 201 回東アジア英語教育研究会

日時：2019 年 10 月 26 日（土）15:30～17:35

場所：西南学院大学

研究発表：

1)「国際人育成への新たなアプローチ」　桂次郎（ジャイロスコープ）

2)“Teaching and Learning of Languages at School in Europe: Main Findings from Eurydice Report 2017” 樋口晶彦（宮崎国際大）

２．支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会

日時：2019 年 7 月 13 日（土）

会場：東海大学熊本キャンパス

議題：

1) 2018 年度活動報告について

2）2019 年度活動計画について

⑵ 支部役員会

①2019 年度第 1 回役員会
日時：2019 年 4 月 20 日（土）
場所：西南学院大学
議題：支部研究大会の準備に関する件、他

②2019 年度第 2 回役員会
日時：2019 年 5 月 25 日（土）
場所：西南学院大学
議題：支部研究大会の準備に関する件、他

①2019 年度第 1 回支部紀要編集委員会
日時：2019 年 6 月 8 日（土）
場所：西南学院大学
議題：『JACET 九州・沖縄支部紀要』第 25 号の編集に関する件

②2019 年度第 2 回支部紀要編集委員会
日時：2019 年 7 月 6 日（土）
場所：西南学院大学
議題：『JACET 九州・沖縄支部紀要』第 25 号の編集に関する件

③2019 年度第 3 回役員会
日時：2019 年 7 月 12 日（金）
場所：東海大学熊本キャンパス
議題：支部研究大会の準備に関する件

④2019 年度第 3 回支部紀要編集委員会
日時：2019 年 8 月 27 日（火）
場所：メール会議
議題：『JACET 九州・沖縄支部紀要』第 25 号の編集に関する件

⑤2019 年度第 4 回支部役員会（予定）
日時：2019 年 10 月 12 日（土）
場所：西南学院大学
議題：秋季学術講演会に関する件、他

⑥2019 年度第 4 回支部紀要編集委員会
日時：2019 年 10 月 26 日（土）
場所：西南学院大学
議題：『JACET 九州・沖縄支部紀要』第 25 号の編集に関する件

⑦2019 年度第 5 回支部役員会
日時：2019 年 11 月 23 日（土）
場所：西南学院大学
議題：未定

⑧2019 年度第 6 回支部役員会（予定）
日時：2020 年 2 月 15 日（土）
場所：西南学院大学
議題：未定

３．その他

1）『JACET 九州・沖縄支部紀要』第 25 号の発行（予定）発行日：2019 年 11 月 30 日（土）

（伊藤健一・北九州市立大学）

＜中国・四国支部＞

１．支部大会、支部講演会、研究会等の開催

⑴ 春季研究大会
日時：2019 年 6 月 1 日（土）13:00～17:55
場所：就実大学
研究発表：
第 1 室

1) “Developing the English Speaking Skills of Staff at a University Hospital” Ian Willey（香川大）
2)「外来語と和製英語の誤用を防ぐ英語語彙指導」松岡博信（安田女子大）
3) “Willingness to Communicate and the Use of Self-access Centers” Gerardine McCrohan, Arran Chambers（香川大）
4) 「医療福祉教育系学部の多職種連携のための初年次英語教育」小﨑順子（川崎医療福祉大）
第２室
1) “Breaking Barriers for L2 Learners of English” Douglas Parkin（山口学芸大）
2) “Socio-cultural Influences on the Learning, Use, and Employment of Communication Strategies Among Japanese EFL Learners” Christian Burrows（岡山理科大）
3)「習熟度によるクラス分けのない大教室における文法の授業実践 ー『なるほど！』と思った表現を自由に選びテスト問題にする試みー」関谷弘毅（広島女学院大）
4)「英字新聞を一緒に読もう」村上博子
第３室
1) 「外国語のエラーは『そのうち治る』のか？ー中・上級英語学習者のライティングに関する一考察ー」西谷工平、中﨑崇（就実大）
2) 「小学校４年生の体育授業における CLIL の実践ー英語を使用した『体つくり運動』を事例としてー」二五義博（海上保安大学校）、冨岡宏健（広島大附属三原小学校）
3)「英語進行形の習得に関する一考察」井口智彰（大島商船高等専門学校）
4) 講演：「英語の音を読む」
講師：豊田昌倫（京都大名誉教授・関西外国語大名誉教授）

⑵ 秋季研究大会
日時：2019 年 10 月 19 日（土）13:10～17:25
場所：愛媛大学
研究発表：
第１室
1) 「大学英語スピーキングクラスにおける、コミュニケーション能力育成のための ペア／個人リハーサルおよびピア／個人レビューの実践」長崎睦子（愛媛大）、折本素（愛媛大）
2) “Further Breaking Barriers for L2 Learners of English” D. Robert, Parkin（山口学芸大）
3) 「大学生の会話文記憶における絵の影響ー英語学習の動機づけに向けてー」ウィリアムズ厚子（香川大）
4) 「英語で教える英語の授業に対する態度に影響を与える要因 ーWTC, コミュニケーション不安, 有能感と英語で教える英語の授業の関係ー」岩中貴裕（山口学芸大）
第２室
1) 「処理可能性理論の示す発達段階は日本人 EFL 学習者のスピーキングとライティングの両方から支持されるのか」道本祐子（宇部工業高等専門学校）
2) 「小学校教員・中学校英語教員が考える ALT とのティーム・ティーチングの課題ー今治市での調査に基づいてー 」池野修（愛媛大）
3) 「高専１年生に対する体育 CLIL の可能性（３）—英語を使用したバスケットボールの授業を事例として—」二五義博（海上保安大学校）、伊藤耕作（宇部工業高等専門学校）
講演：「山口大学国際総合科学部における英語教育の現状と展望」
講師：藤原まみ（山口大）

２．支部総会・支部役員会等の開催
⑴ 第１回支部役員会
日時：2019 年６月１日（土）11:15～12:45
場所：就実大学
議題：

(1) 報告事項
1) 2018 年度中国・四国支部事業報告
2) 支部紀要 16 号について
3) 理事会報告（2019 年 5 月 19 日開催）
(2) 審議事項
1) 2019 年度の活動について
2) 2019 年度中国・四国支部人事について
3) 2020 年度の事業計画について
4) 第 60 回（2021 年度）の記念国際大会（中国・四国支部担当）の開催校について
5) 紀要編集委員長の選考について
6) その他

(2) 第 2 回支部役員会
日時：2019 年 10 月 19 日（土）11:15～12:45
場所：愛媛大学
1. 報告事項
1) 理事会報告（2019 年 8 月 27 日開催）
2) 支部紀要 17 号について
2. 審議事項
1) 2019 年度の活動について
2) 2020 年度中国・四国支部人事について
3) 2020 年度の事業計画について
4) 第 60 回（2021 年度）の記念国際大会（中国・四国支部担当）
5) 支部紀要「発行規定」の一部改正
6) その他

3．その他
(1) 支部紀要の発行
『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』16 号
発行日：2019 年 3 月 31 日
(2) 支部ニューズレターの発行
『JACET 中国・四国支部 Newsletter』23 号
発行日：2019 年 7 月 30 日

（松岡博信・安田女子大学）

＜関西支部＞

1．支部大会、支部講演会、研究会等の開催
(1) 支部大会
日時：2019年11月16日（土）10:00～17:45
場所：同志社大学今出川キャンパス
大会テーマ：変化の時代を生きる英語教育
基調講演：
「英語教育における言語イデオロギーを問う」久保田竜子（カナダ・ブリティッシュコロンビア大）
特別講演：
1) “Emotions, Cultures, and Stories: Against the Impoverishment of Meaning” 柳瀬陽介（京都大）
2) 「外国語教育政策研究の理論・方法」寺沢拓敬（関西学院大）
企画シンポジウム：
「大規模スピーキングテストの舞台裏、どこがどう難しいのか？—京都工芸繊維大学の実践より」羽藤由美（京都工芸繊維大）・神澤克徳（京都工芸繊維大）・光永悠彦（名古屋大）
研究発表：
1)「科学技術英語プレゼンテーションを成功させるために－英語母語話者の理系研究者の視点から－」島村東世子（大阪大）
2)「英語学習支援セッションにおける日本人英語学習者と留学生との会話にみられる意味交渉について」歳岡冴香（近畿大）
3)「ライティング支援センターSAPPにおける院生チューターの指導戦略」山下美朋（立命館大）
4)「授業での到達度が英語の熟達度の伸びに及ぼす影響の検証：潜在成長曲線モデルを用いた試み」西谷敦子（京都産業大）
5)「英語学習者音声コーパス内に収録されている模範音声の韻律的特徴」服部拓哉（大阪大）
6)「ラッシュモデルを用いた英語音声変化認識の難易度分析に関する予備報告」松村優子（近畿大）
実践報告：
1)「Argumentative Writing Skillの向上を目指して」蔦田和美（関西外国語大短期大学部）
2)「クラス合同発表イベントが学生の学習意欲に及ぼ

す影響」落合淑美（立命館大）・大賀まゆみ（立命館大）
3)「正課授業での立命館大学ラーニングコモンズ利用実践の報告　オーディエンスと発表者の視点から」大賀まゆみ（立命館大）・落合淑美（立命館大）
4) "Assessing the Potential Benefits and Problems in Using Podcasts in English Language Education in Japan" パーソンズ　マーティン（阪南大）
5)「CALLクラスにおけるアクティブラーニング：ユネスコ世界遺産を中心としたツアー企画発表」塩見佳代子（立命館大）
6)「Can-do Descriptorに基づく『振り返りシート』の自律的言語学修への効果」野田三貴（大阪市立大）・山本修（大阪市立大）
コロキアム：
1)「アカデミックリテラシーの主要な枠組みとケーススタディ：今後の大学英語教育におけるEAP研究発展についての考察」上條武（立命館大）・長尾明子（龍谷大）・西条正樹（びわこ成蹊スポーツ大）
2)「グローバル化する日本における言語ニーズを再考する：芸術家たちの事例から」渡辺紀子（立命館大）・三崎敦子（近畿大）・野口ジュディー（神戸学院大）
3)「Puzzlingしませんか：EPによる授業分析」村上裕美（関西外国語大短期大学部）・樫本洋子（大阪市立大・院）・竹田里香（姫路獨協大）・高田哲朗（京都外国語大）・冨田房敬（名古屋学院大・院）・東郷多津（京都ノートルダム女子大）

(2) 支部講演会
① 第1回支部講演会
日時：2019年6月22日（土）15:30～17:00
場所：神戸国際会館
題目：「ディープラーニングで進化する機械翻訳：何ができて、何ができないか」井佐原均（豊橋技術科学大）
② 第2回支部講演会
日時：2019年10月5日（土）15:30～17:00
場所：同志社大学今出川キャンパス
テーマ：「大学における多読指導を再考する：多読指導における教員の役割とは」
研究発表：
1)「基本に戻って多読を成功 "Top Ten Principles for Teaching Extensive Reading"」髙瀬敦子（関西学院大）
2)「成功する多読を導く環境の構築を目指して：Engaged Reading モデルの観点から」吉田弘子（大阪経済大）
3)「多読指導のゴールとは？　ポスト多読を見据えた指導を考える」吉田真美（京都外国語大）

２．支部総会・支部役員会等の開催
(1) 支部総会
日時：2019年11月16日（土）
場所：同志社大学今出川キャンパス

(2) 支部役員会
① 第1回支部役員会
日時：2019年6月22日（土）13:30～15:00
場所：神戸国際会館
議題：
1) 支部長報告
2) 2019年度事業計画
3) 2018年度予算実績および2019年度予算
4) 2019年度人事
5) 研究企画委員会報告
6) 紀要編集委員長報告
7) 2020年度国際大会について
8) その他

② 第2回支部役員会
日時：2019年10月5日（土）13:00～14:30
場所：同志社大学今出川キャンパス
議題：
1) 支部長報告
2) 2020年度事業計画（案）について
3) 2020年度予算（案）について
4) 2020年度人事（案）について
5) 支部紀要投稿要領の変更（案）について
6) 研究企画委員会報告
7) 紀要編集委員長報告
8) 2020年度JACET国際大会について
9) その他

３．その他
(1) 支部ニューズレターの発行
1) *JACET Kansai Newsletter* No. 84（電子媒体）
発行日：2019年7月31日
2) *JACET Kansai Newsletter* No. 85（紙媒体）
発行日：2019 年 11 月 1 日

（坂本輝世・滋賀県立大学）

＜中部支部＞

1．支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 支部講演会
日時：2019年6月15日（土）13:30～17:30
場所：名城大学天白キャンパス
特別講演：
「プレゼンテーションを通した効率的英語習得」野中 アンディ（コミュニケーションスキル協会）
シンポジウム：
テーマ：「英語プレゼンテーションをどう教えるか―指導と評価―」
モデレーター：村田泰美（名城大）
発表１：
「心に届くプレゼンテーションの為に」小口真澄（MARBLES）
発表２：
「『祭り』の準備 ―英語スピーチの学びをうながす実践共同体の演出―」三熊祥文（広島工業大）

(2) 秋季定例研究会
日時：2019年11月16日（土）
場所：愛知大学名古屋キャンパス
実践報告：
1）“Learners' beliefs about error logs” Jane Hislop, Christopher Adam Lear（Nagoya University of Foreign Studies）
2)「英語専攻の学生に対する『アメリカ文化』授業の試み」地村みゆき（愛知大）
研究会発表
「学習者間の『対話』に注目する」佐藤雄大・森明智（名古屋外国語大）

2．支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会
① 第1回
日時：2019年6月15日（土）
場所：名城大学天白キャンパス
議題：
1）2018年度本部報告
2）2018年度中部支部事業報告
3）2018年度中部支部会計収支報告
4）2019年度人事について
5）2019年度中部支部事業計画について
6）2019年度中部支部予算について

② 第2回（予定）
日時：2019年11月16日（土）
場所：愛知大学名古屋キャンパス

(2) 支部役員会
① 2019年度第3回役員会
日時：2019年6月15日（土）
場所：名城大学天白キャンパス
議題：
1）本部報告
2）事務局報告
3）会計報告
4）支部講演会

② 2019年度第4回役員会
日時：2019年7月13日（土）
場所：名古屋工業大学
議題：
1）本部報告
2）事務局報告
3）会計報告
4）その他

③ 2019年度第5回役員会
日時：2019年10月19日（土）
場所：名古屋工業大学
議題：
1）本部報告
2）事務局報告
3）会計報告
4）秋期定例研究会

④ 2019年度第6回役員会
日時：2019年11月16日（土）
場所：愛知大学名古屋キャンパス

⑤ 2019年度第7回役員会（予定）
日時：2019年12月7日（土）
場所：名古屋工業大学

⑥ 2019年度第8回役員会（予定）
日時：2020年1月11日（土）
場所：名古屋工業大学

３．その他
(1) 支部紀要の発行
『中部支部紀要』17号
発行日：2019年12月20日（予定）
(2) 支部ニューズレターの発行
JACET-Chubu Newsletter No.43
発行日：2019年12月20日（予定）

（佐藤雄大・名古屋外国語大学）

＜関東支部＞

１．支部大会、支部講演会、研究会等の開催
(1) 支部大会
日時：2019 年 7 月 7 日（日）9:00～18:05
場所：東洋大学白山キャンパス
大会テーマ：時代が変わる・英語教育が変わる―産官学のダイバーシティへの取り組み―
Changing Eras & Moving English Education: Collaborations for Diversity Among Professional, Governmental and Academic Fields
基調講演：
「グローバル人材の要件と英語教育」"Global Leader Requirements & English Capability" 内永ゆか子（NPO 法人 J-Win（ジャパン・ウィメンズ・イノベイティブ・ネットワーク）理事長）
研究発表 15 件、実践報告 9 件、賛助会員発表 2 件、開催校企画 1 件、関東支部企画特別講演 2 件、基調講演 1 件、全体シンポジウム 1 件

(2)支部講演会
①第 2 回講演会
日時：2019 年 6 月 8 日（土）16:00～17:20
場所：東洋大学白山キャンパス
題目：「オリパラ運営における共通語：英語の重要性～大会ボランティアプログラムを例として～」西川千春（笹川スポーツ財団特別研究員、明治大）

②第 3 回講演会
日時：2019 年 10 月 12 日（土）16:00～17:20
場所：東洋大学白山キャンパス
題目：「外国語教育が揺らす学習者の価値観―グローバル化社会と機械翻訳の時代に何を教えるのか」酒井志延（千葉商科大）
※本講演会は台風の接近に伴い、12 月 14 日（土）に延期となった。

講演会・ワークショップ（JACET 関東支部・東洋大学共催企画）
①JACET 関東支部・東洋大学共催企画（第 2 回）
日時：2019 年 9 月 14 日（土）16:00～17:20
場所：東洋大学白山キャンパス
題目："Creative Commons & Copyrights for the Creative Minded Teacher" Rab Paterson（東洋大）

②JACET 関東支部・東洋大学共催企画（第 3 回）
日時：2019 年 11 月 9 日（土）16:00～17:20
場所：東洋大学白山キャンパス（予定）
題目：「「主体的・対話的で深い学び」を小・中・高（・大）でどのようにつなげていくか？―つながるツールとつなげる教師―」久村研（田園調布学園大・名誉教授）・栗原文子（中央大）

③JACET 関東支部・東洋大学共催企画（第 4 回）（予定）
日時：2020 年 1 月 11 日（土）16:00～17:20

場所：東洋大学白山キャンパス
題目：「統計の基礎の基礎―データの読み方―」　山口高領（秀明大）

※講演会等の詳細は、支部会員 ML にて配信及び関東支部 HP 上に掲載されます。

２．支部総会・支部役員会等の開催

⑴支部総会

①第 1 回支部総会
日時：2019 年 7 月 7 日（日）12:30～13:00
場所：東洋大学白山キャンパス
議題：2018 年度事業報告・会計報告、2019 年度事業計画

②第 2 回支部総会
日時：2019 年 11 月 9 日（土）15:20～15:50
場所：東洋大学白山キャンパス
議題：2019 年度支部事業計画・予算、2020 年度人事

⑵支部役員会

①第 3 回支部運営会議
日時：2019 年 6 月 8 日（土）14:30～15:30
場所：東洋大学白山キャンパス
議題：
1) 支部大会について
2) 支部紀要募集について

②第 4 回支部運営会議
日時：2019 年 9 月 14 日（土）14:30～15:30
場所：東洋大学白山キャンパス
議題：
1)今後の支部大会運営について
2)支部紀要の査読システムについて

③第 5 回支部運営会議
日時：2019 年 10 月 12 日（土）14:30～15:50
場所：台風の接近に伴い、オンライン会議での開催となった。
議題：
1)2020 年度事業計画書・予算書について
2)支部人事変更について
3)第 13 回（2020 年度）支部大会について
4)支部紀要について

④第 6 回支部運営会議
日時：2019 年 11 月 9 日（土）14:00～15:10
場所：東洋大学白山キャンパス
議題：
1)2020 年度事業計画書・予算書案について
2)支部人事変更案について
3)第 13 回（2020 年度）支部大会について

2019 年度支部運営会議（予定）
⑤第 7 回 2019 年 12 月 14 日（土）14:30～15:30（場所：東洋大学）
⑥第 8 回 2020 年 1 月 11 日（土）14:30～15:30（場所：東洋大学）
⑦第 9 回 2020 年 3 月 14 日（土）13:30～14:30（場所：東洋大学）

３．その他

⑴支部ニューズレターの発行
『JACET 関東支部ニューズレター』第 13 号
発行日：2019 年 9 月 30 日

（田口悦男・大東文化大学）

＜東北支部＞

１．支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 支部大会
日時：2019 年 6 月 29 日（土）14:00～16:05
場所：東北学院大学土樋キャンパス
講演：
「授業改善における海外研修」冨田かおる（山形大）
研究発表：
「小学校英語 Small Talk の文法的分析」高橋潔（宮城教育大）
実践報告：
「大学英語授業におけるスピーキング・テスト実践の試み」村野井仁（東北学院大）

(2) 支部例会
日時：2019 年 11 月 24 日（日）13:30～16:20
場所：TKP 仙台西口ビジネスセンター
研究発表：
「ドラマにおける介護の職業像～介護職はなぜ再生のストーリーに組み込まれるのか～」五十嵐紀子（新潟医療福祉大）
「タキソノミー・テーブルを用いた学びの視覚化：教職課程学生の英語発音に対する意識」川井一枝（宮城大）
「欧米とアセアンの(準)英語圏への留学動機と成果」小林葉子（岩手大）
「文字情報からの文章再生とリスニング音声情報からの文章再生の比較」小林英治（山形県立谷地高等学校）

２．支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会
日時：2019 年 6 月 29 日（土）13:10～13:40
場所：東北学院大学土樋キャンパス
議題：
1) 2018 年度事業報告、支部会計報告
2) 2019 年度事業計画案、予算案⊡運営方針、人事案等
3) *TOHOKU TEFL*（『JACET 東北支部紀要』）Vol. 8、『東北支部通信（*JACET Tohoku Newsletter*）』No.46 について

(2) 支部役員会
②第 2 回役員会
日時：2019 年 6 月 29 日（土）12:00～13:00
場所：東北学院大学土樋キャンパス
議題：
1) 理事会報告
2) 2019 年 11 月支部例会について
3) *TOHOKU TEFL*（『JACET 東北支部紀要』）Vol. 8、『東北支部通信（*JACET Tohoku Newsletter*）』No.46 について
4) その他

③第 3 回役員会
日時：2019 年 11 月 24 日（日）12:00～13:30
場所：TKP 仙台西口ビジネスセンター
議題：
1) 2020 年度事業計画案について
2) 2020 年度予算案⊡運営方針について
3) 2020 年度人事案について
4) *TOHOKU TEFL*（『JACET 東北支部紀要』）Vol. 8および『東北支部通信（*JACET Tohoku Newsletter*）』No. 46 について
5) その他

３．その他

(1) 支部紀要の発行（予定）
TOHOKU TEFL（『JACET 東北支部紀要』）Vol. 8
発行日：2020 年 3 月 31 日

(2) 支部ニューズレターの発行（予定）
『JACET 東北支部通信（*JACET Tohoku Newsletter*）』No. 46

発行日：2020 年 3 月 31 日

（岡﨑久美子・仙台高等専門学校）

＜北海道支部＞

１．支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 支部大会

日時：2019 年 7 月 6 日（土）13:00～17:15

場所：北海道武蔵女子短期大学

基調講演：

「教室内英語スピーキング評価の実現可能性：年間を通じた安定的な実施に向けて」小泉利恵（順天堂大）

シンポジウム：

テーマ：Integrating Theory and Practice in Testing and Assessment

コーディネーター：Kiwamu Kasahara（Hokkaido University of Education）

助言者：Rie Koizumi（Juntendo University）

1）“A Testing Assessment Course for Pre-service English Teachers” Kiwamu Kasahara（Hokkaido University of Education）

2）“Evaluating classroom speaking activities with a performance test” Rintaro Sato（Nara University of Education）

3）“Evaluating students' writing: Why, what, and how? ” Aiko Sano（Sapporo International University）

研究発表：

1)「英語学習における動機減退のプロセスとその要因－PAC 分析と複線径路・等至性アプローチ（TEA）による分析－」三ツ木真実（小樽商科大）

2)「セラピスト養成大学で英語プログラムを創る試み－タスクとプロジェクトを学びの中心に据えて」大池京子（北海道千歳リハビリテーション大）

(2) 研究会

①2019 年度第 1 回研究会

日時：2019 年 11 月 23 日（土）

場所：北海道教育大学札幌駅前サテライト

②2019 年度第 2 回研究会（予定）

日時：2020 年 2 月 29 日（土）

場所： 天使大学

２．支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会

日時：2019 年 7 月 6 日（土）12:30～12:50

会場：北海道武蔵女子短期大学

議題：

1) 支部長報告

2) 2018 年度事業報告

3) 2019 年度事業計画

4) 2019 年度人事

5) 各種委員会報告

6) 2020 年度事業計画案

7) 2020 年度人事案

(2) 支部役員会

①第 1 回役員会

日時：2019 年 5 月 25 日（土）10:00～12:00

場所：北海学園大学

②第 2 回役員会

日時：2019 年 7 月 6 日（土）10:00～12:00

場所：北海道武蔵女子短期大学

３．その他

なし

（三ツ木真実・小樽商科大学）

編集後記

『JACET 通信』206 号をお届けいたします。先生方皆さまにおかれましては、お忙しいところ、原稿をご執筆下さりまして、どうもありがとうございました。心より御礼申し上げます。

巻頭言では、寺内会長が創立 60 周年に向けての諸活動の概要を、お示し下さりました。また、第 58 回国際大会の様子も詳細に掲載されております。今回は、かなり充実した内容となりました。会員の皆さまにおかれましては、ぜひご一読いただけますなら幸いです。（金子）

編集：『ＪＡＣＥＴ通信』委員会

理事　冨田かおる・山形大学
委員長　金子淳・山形大学
副委員長　田口悦男・大東文化大学
副委員長　岡﨑久美子・仙台高等専門学校
水島孝司・南九州短期大学
Gilner, Leah・愛知大学
伊藤健一・北九州市立大学
松岡博信・安田女子大学
三ツ木真実・小樽商科大学
坂本輝世・滋賀県立大学
佐藤雄大・名古屋外国語大学

『JACET 通信』第 206 号

2019 年 12 月 1 日発行

発行者　一般社団法人　大学英語教育学会（JACET）
代表者　寺内　一
発行所　〒162-0831　東京都新宿区横寺町 55
電話(03) 3268-9686　FAX(03) 3268-9695
http://www.jacet.org/